第３項　弥生～古墳時代

ＮＲ1303

１．遺構(Fig.27・28, PL.２)

Ａ－１・３区で検出された河道である。Ａ－１区では平面プランのみが捉えられたが，Ａ－３区では全面的に掘削を行った。遺物が全く出土しなかったため，帰属時期を特定することは困難である。しかし，ＮＲ1303が縄紋時代晩期のＮＲ1302の埋没後に堆積したⅥ層を削り込んでいること(Fig.24参照)，またＮＲ1303の埋没後，その堆積土上層に弥生時代中期の遺構ＳＫ1143が形成されていることから，本河道の形成及び埋没は，弥生時代中期以前に完了したと考えられる。調査ではＢ－３区東端から区境を越えてＡ－１区西端にかけて蛇行する約20ｍの範囲が検出されている。Ａ－１区ではその南側を流れるＮＲ1104によって切られているようである。ほぼ南北の流路方向をもつが，流水の方向は不明である。河道は調査区内の一部で検出されたに過ぎず，東側の川岸は調査区外に位置しており，現状での河道の幅は18ｍ以上，深さは２ｍ以上であった。堆積土は微砂・粘土を主体としており，砂礫はほとんど認められなかった。また下層ではかなり強い還元色を呈していた。

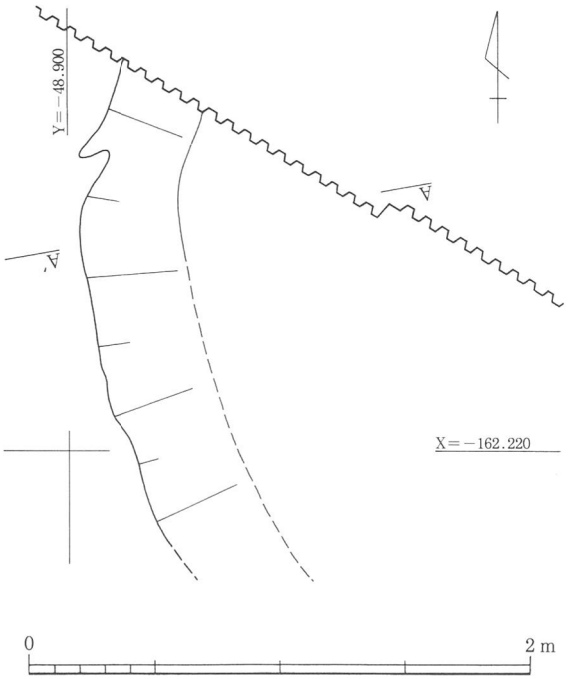
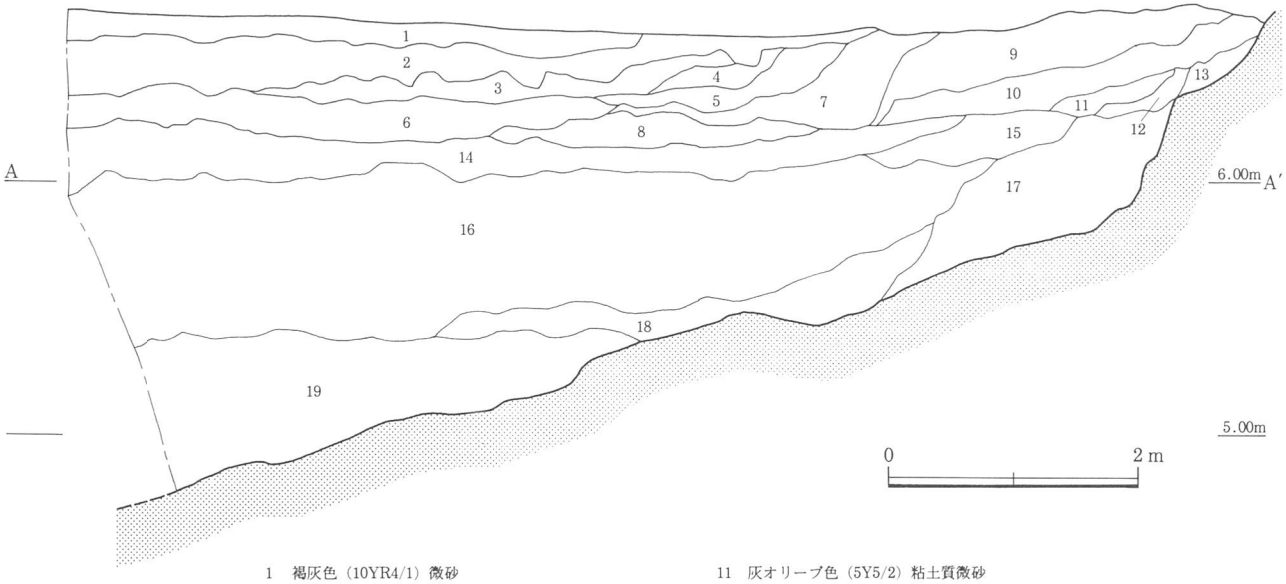


Fig.27　ＮＲ1303平面図



1　褐灰色（10YR4/1）微砂
2　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂
3　黄灰色（2.5Y5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）微砂（土器片含む）
5　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂（炭化物・土器片含む）
6　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂
7　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質微砂（炭化物含む）
8　灰色（5Y5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
9　黄褐色（2.5Y5/4）微砂
10　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂
11　灰オリーブ色（5Y5/2）粘土質微砂
12　灰黄褐色（10YR4/2）粘土質微砂
13　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
14　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土質微砂
15　灰色（10Y5/1）微砂質粘土
16　緑灰色（7.5GY5/1）微砂質粘土
17　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂
18　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂
19　緑灰色（10GY6/1）微砂質粘土

Fig.28　ＮＲ1303断面図

ＮＲ1104

１．遺構(Fig.29，PL.３)

Ａ－１区で検出された河道で，この調査で検出された自然流路のうちで最大の規模を有する。Ａ－１区はＮＲ1104によって面積の大半が占められている。弥生時代中期の形成になる大溝ＳＤ1305が，ＮＲ1104から分岐すると考えられるので，少なくとも当該期には形成されていた河道と考えられる。大きく蛇行する幅広い流路をもち，北東から南西方向に水流があったとみられる。すなわち河道の南東岸が左岸，北西岸が右岸となる。河道の幅は約29～33ｍで，北東が僅かに狭く南西が広くなっている。Ａ－１区では北西側を除く３方に矢板を打設して調査を行い，ＮＲ1104のほぼ中央部に設けた深度確認のためのトレンチで人力掘削を実施したが，安全面から川底を確認する以前に掘削を中止した。このため検出面から0.9ｍ，標高3.5ｍまでの深度が確認されたにとどまる。河道内堆積土は粗砂・細砂・微砂などを主体とし，部分的に木葉・種子などの植物遺体の溜まりが形成されていた。ＮＲ1104では弥生時代中期の面と認識して河川肩部の検出を行ったが，右岸ではさらにその下層には時代的に先行すると思われる砂層が厚く堆積しており，縄紋時代晩期の河道ＮＲ1302を切り込んで形成された可能性がある。この河道は古墳時代前期には河成堆積物によってほぼ完全に埋没する。右岸付近の堆積土から庄内式併行期の古式土師器がまとまって出土しており，また古墳時代前期には右岸に沿って大溝ＳＤ1108が形成されていることから，河道は概ね左岸から右岸へと埋没したと考えられる。土器の大半は河道内から散発的に出土したが，左岸河畔付近では弥生後期～庄内式併行期の土器溜ＳＷ1157・1158が認められた。

２．遺物(Fig.30～34，PL.62～65)

河道内堆積土からは弥生時代中期～古墳時代初頭の土器が多量に出土したが，主体となるのは後期弥生土器・古式土師器で，中期弥生土器は量的に僅少である。須恵器は全く出土していない。

弥生時代中期の土器には壷(25・26・29)・高杯(27)・脚台(28)・甕(30～34)がある。このうち25・28は右岸の川縁から転落した状態で検出され(PL.３)，その他は河道中央部の砂層から出土している。25は有段口縁の広口壷で，頸部に波状紋，有段部直上に２条の凹線紋を巡らせる。26は把手を欠失した水差で，張り出して稜をもつ体部に，筒状の短い頸部を備える。27は盤状の杯部をもつ高杯である。28は台付鉢の脚台と思われ，多方向に透孔を設けている。29の広口壷は，口縁端面を上方に僅かに肥厚させ，内傾する面を作る。30～33の甕は外面ハケ調整を主体とし，口縁端面を上方に肥厚させて端面を持つ30・32・33，口縁を内湾させる31がある。34は大形甕の底部である。

弥生時代後期～古墳時代初頭の土器には，壷(35～54・72)，甕(55～67)，高杯(68～71)，器台(73・74)，鉢(75～80)，製塩土器(81)，手焙(82)などがある。広口長頸壷35は口縁端部を僅かに上下に肥厚させて装飾帯とし，竹管紋を押捺した円形浮紋を４個１単位で配列する。壷36は下膨れの体部から，頸部にくびれをもたせて広がる口縁をもち，口縁部外面を肥厚させて外傾する端面を作る。37～42は広口壷である。37は口縁端部に明瞭な端面を作り，刻目を連続的に施している。38は口縁部の上半が弱い受口状を呈する。40は頸部の屈曲直上に刻目による装飾を施す。39・41・42は装飾性のない広口壷で，外面ミガキを主体とした調整で仕上げられる。43～48は複合口縁壷である。43・44は口縁部の屈曲が弱いが，45～48は明瞭に口縁部が屈曲する。45は無紋，46は口縁が頸部から屈曲する部分に斜方向の刻目，47は口縁部中央に２個１単位の竹管紋，48は頸部直下に突帯を貼付け，斜方向刻目を施している。49・50は広口壷系かと思われる小形壷である。51・52は細頸直口壷である。51はやや口縁部が長く，頸部が絞られている。52の体部下半には穿孔がある。53・54は直口壷系の壷Ｘで，54は口縁部を竹管紋，口縁

1　灰オリーブ色（5Y5/3）粘土質微砂
2　灰オリーブ色（5Y6/2）粘土質微砂
3　黒褐色（2.5Y3/2）粘土質微砂
4　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂
5　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂
6　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
7　灰色（7.5Y5/1）微砂（土器片含む）
8　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質微砂（土器片含む）
9　青灰色（5BG5/1）粘土
10　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土質細砂
11　浅黄色（7.5Y7/3）粘土質微砂（土器片含む）
12　オリーブ灰色（10Y5/2）粗砂
13　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
14　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
15　オリーブ灰色（10Y5/2）粘土質微砂
16　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
17　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土質細砂
18　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
19　灰オリーブ色（5Y5/2）粘土質微砂
20　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
21　オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土質微砂

弥生中～後期の基盤

SD1108

Fig. 29　ＮＲ1104平面図・断面図

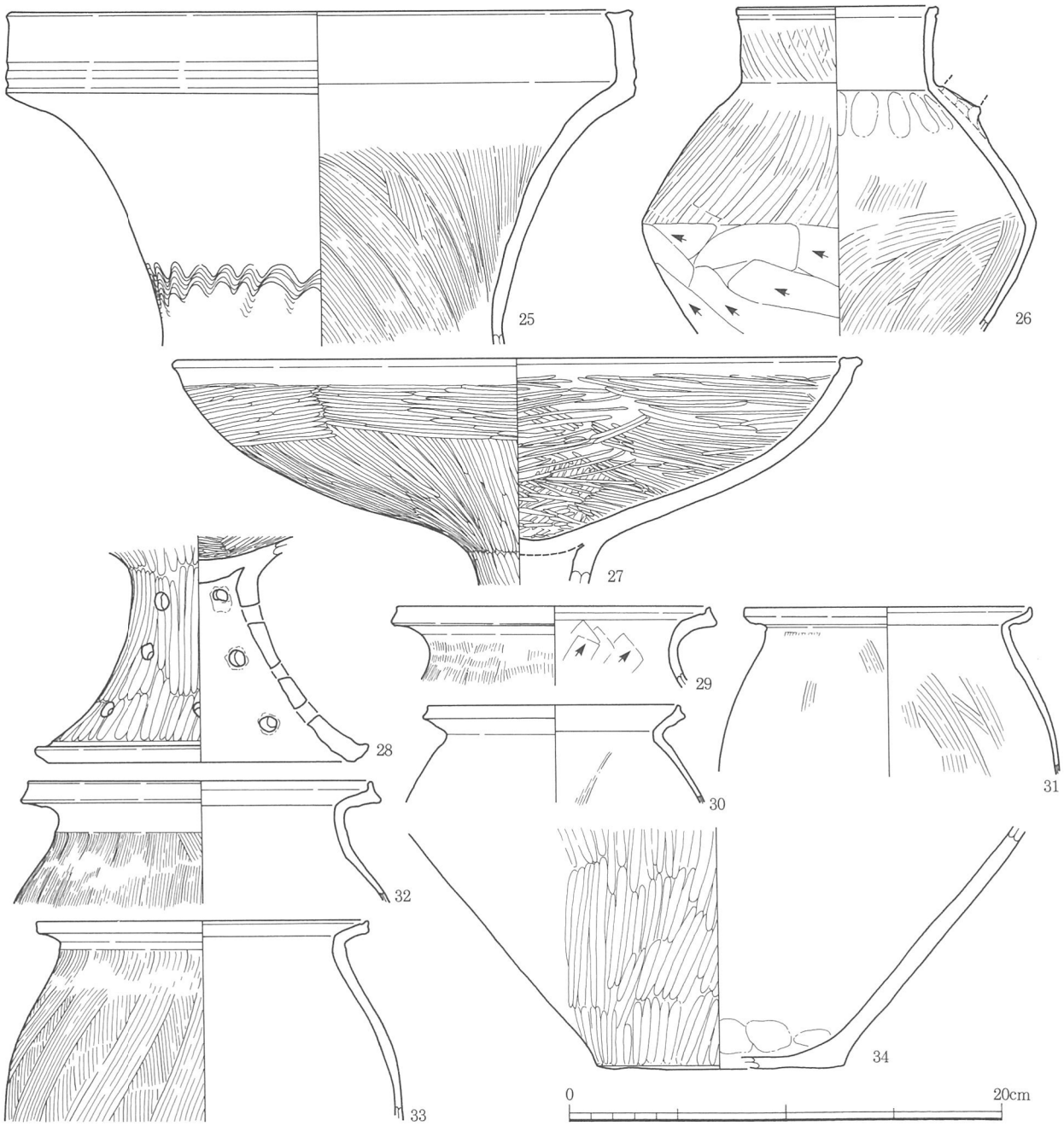


Fig. 30　ＮＲ1104出土遺物実測図（１）

端部を刻目，頸部を波状紋で飾る。55～64は弥生形甕Ａで，体部幅と器高との関係において，各種の形態が認められる。65は弥生形台付甕である。66・67は庄内式甕Ａで，いずれも細筋タタキの通有の形状のものである。また67の底部には狭い平坦面が認められる。68・69は有稜高杯，70・71は椀形高杯であるが，それぞれ両者ともに型式学的な隔たりがある。72は口縁部が大きく開き，口縁端部を上下に拡張して幅広い端面を作る広口壷Ｃbと思われ，端面と口縁内面を鋸歯状の櫛描波状紋で飾る。73は大形器台Ａであろう。74は小形器台Ａとの形態的関連を窺わせるが，大形の個体のため大形器台Ｘとしておく。鉢には小形鉢Ａの77・78，小形鉢Ｃの79と，低い脚台をもつ小形鉢Ｘ75・76がある。また口縁部の形状からみると椀形に内湾する傾向がある75・77，直線的な78，半球状の体部に口縁部を付加した76・79・80がある。80は中形鉢である。81は口縁が直線的に強い立ち上がりをみせるタタキ成形の製塩土器Ｂである。82の手焙は丸底の底部，ほぼ直立する体部，半球状の覆部を備えている。

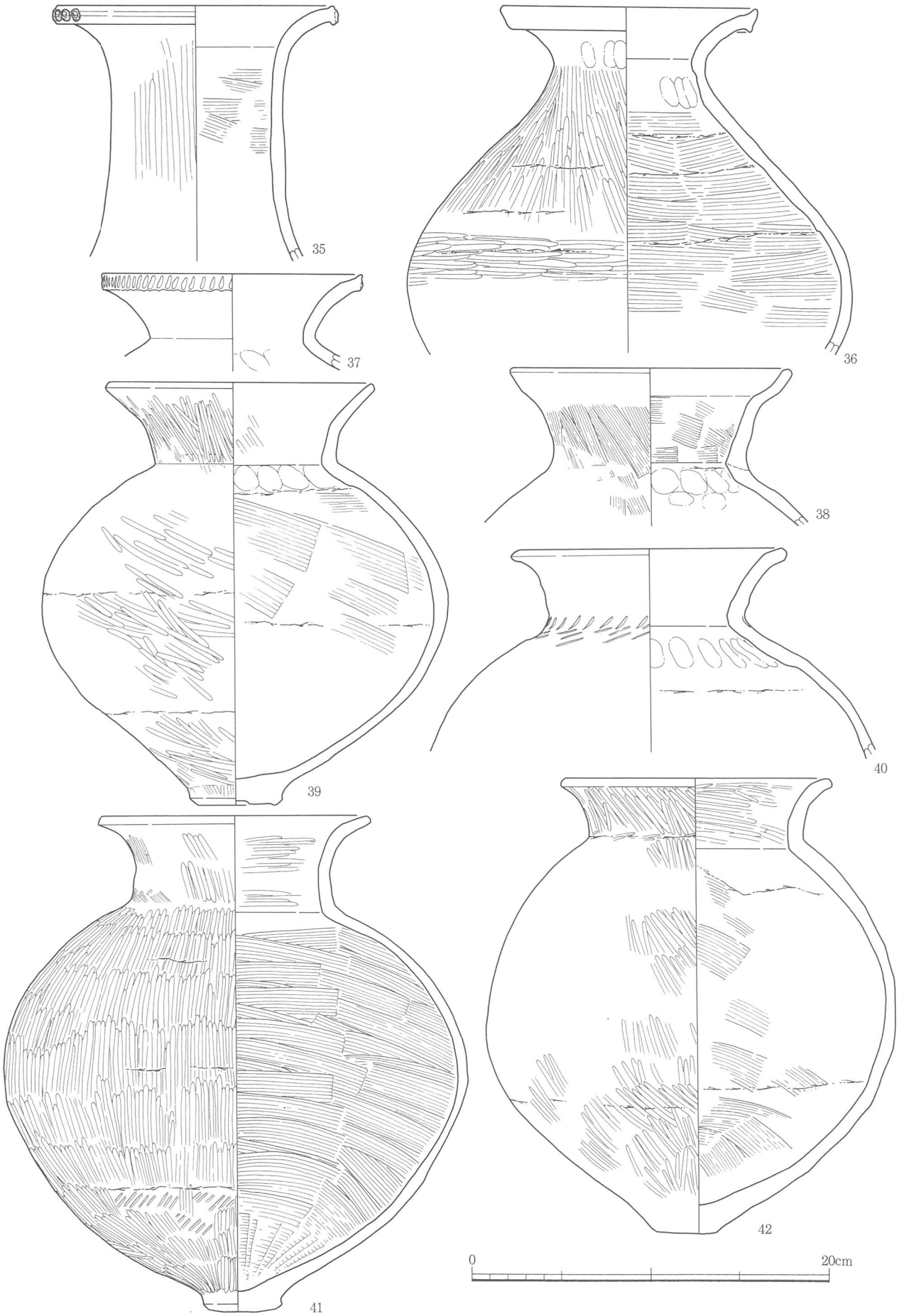


Fig. 31　ＮＲ1104出土遺物実測図（２）

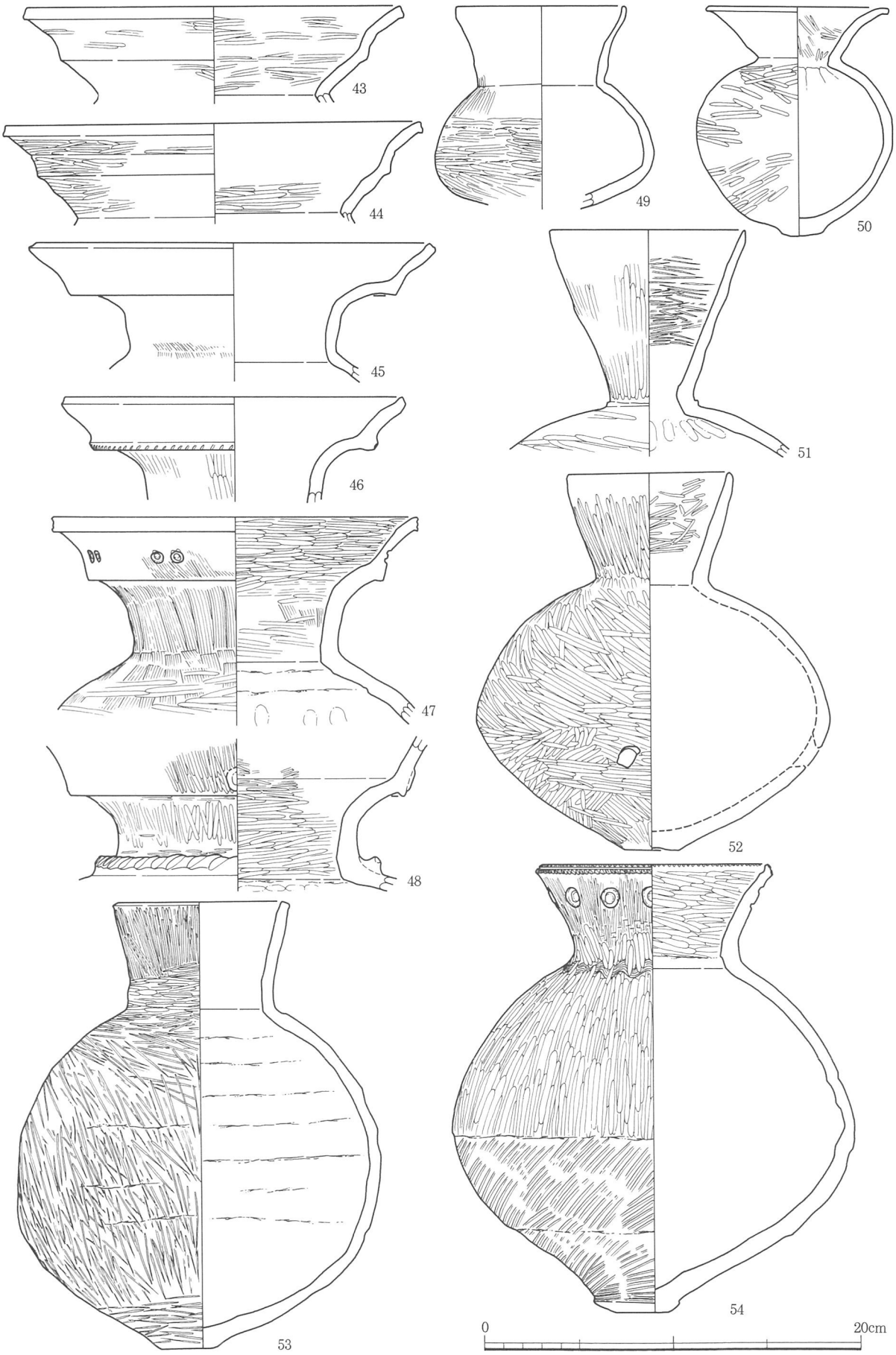


Fig. 32　ＮＲ1104出土遺物実測図（３）

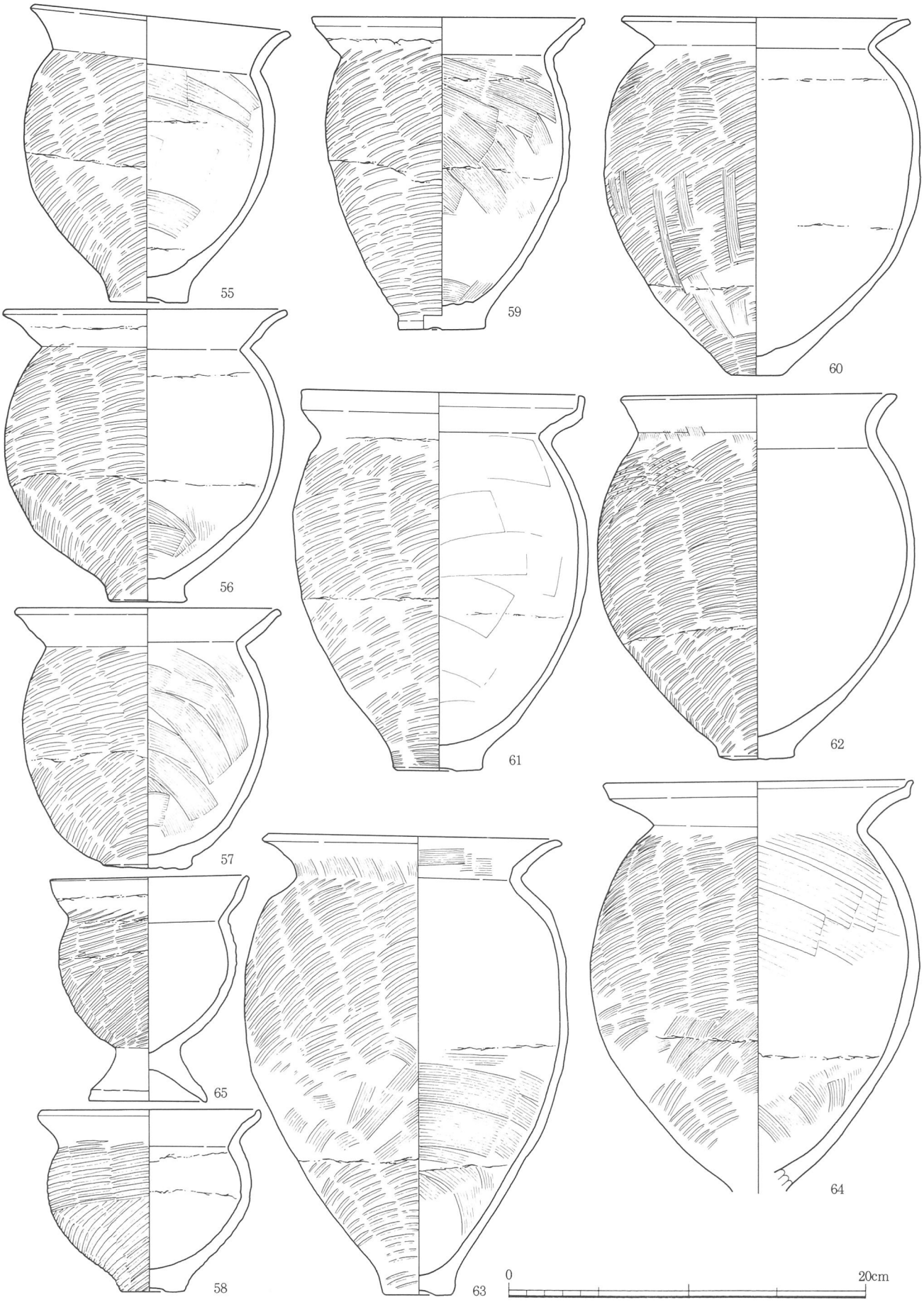


Fig. 33　ＮＲ1104出土遺物実測図（４）

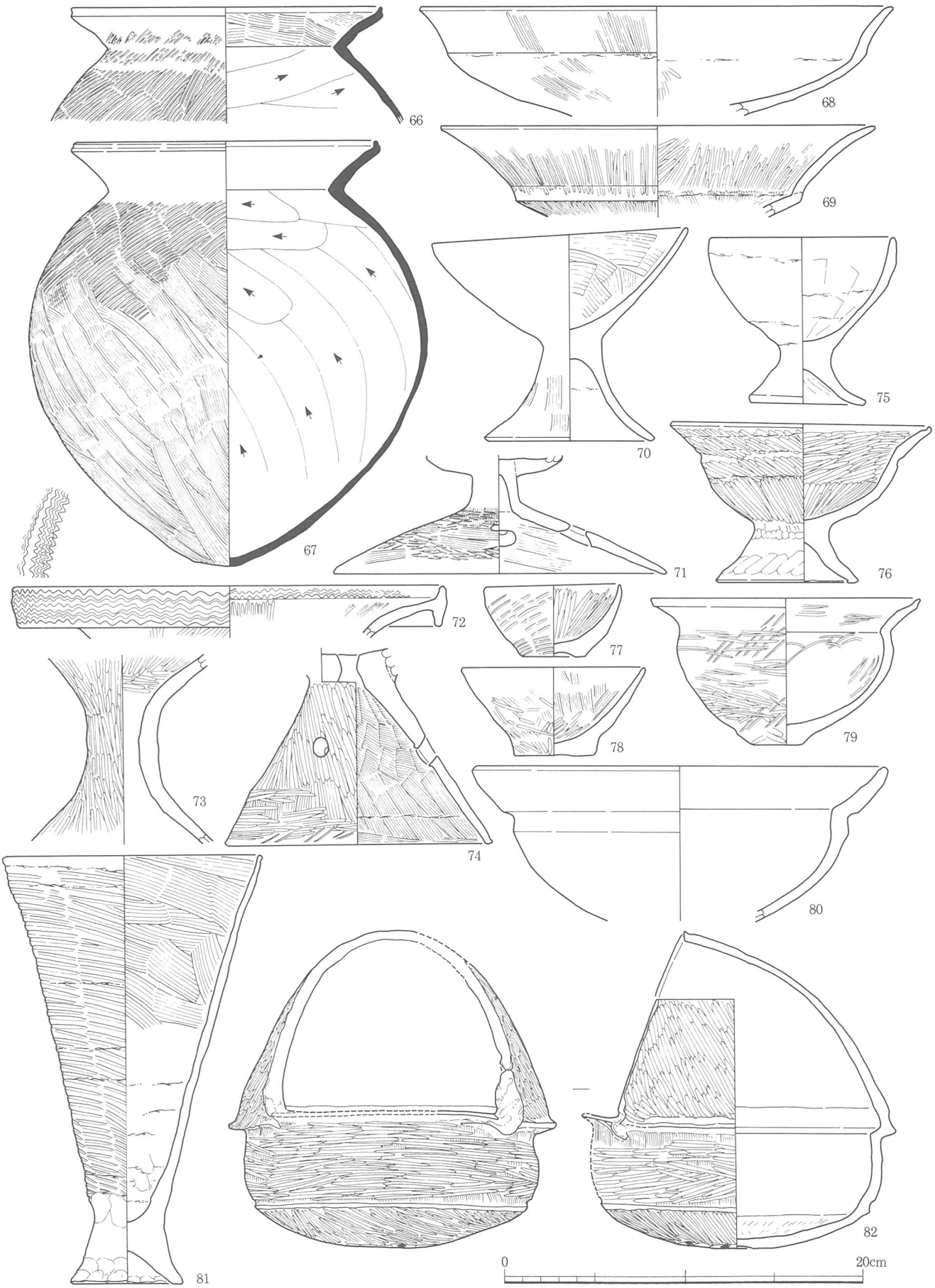


Fig. 34　ＮＲ1104出土遺物実測図（５）

ＳＷ1157・1158

１．遺構(Fig.35, PL.３)

ＮＲ1104左岸の河畔傾斜部分で認められた後期弥生土器を主体とする土器溜である。ＮＲ1104の中央を横断するように設けた土層観察用のトレンチを中心として，西側と東側に帯状の土器溜が存在していた。西側は後期弥生土器，東側は庄内式土器・庄内式併行期の土器を主体としていたため，前者をＳＷ1157，後者をＳＷ1158として土器の分離を行ったが，相互間では一部に少量ながらも土器の混在が認められた。このため一部の土器については型式学的所見により分別を行っている。

2-a．ＳＷ1157遺物(Fig.36～43, PL.66～70)

出土遺物には壷(83～108)，高杯(109～125)，鉢(126～143)，甕(144～164)，大形器台(165～167)，製塩土器(168～173)，蛸壷(174・175)がある。83・84は垂下口縁をもつ広口壷Ｃで，外反する口縁に垂下部を付加して装飾帯とし，外面に３～４条の擬凹線を巡らせた上に竹管紋を押捺した円形浮紋を配置している。85は複合口縁風の作りで，口縁外面に深い平行条線を装飾的に刻んだ壷Ｘである。また口縁端面，口縁屈曲部直上に竹管紋を押捺した円形浮紋を一定間隔で配している。外来系土器と思われ，器台の可能性もある。86の無頸壷は小破片のため，口縁部の有孔の有無は不明である。87・88は広口壷Ｄで，共に口縁端部直下に粘土帯を貼付し，口縁端面を肥厚させている。89～94は広口壷Ａで，体部外面はミガキＡ，ハケなど平滑技法が用いられる。このうち94は長めの体部，擬凹線を有する口縁端面など，型式学的に古い要素を留めている。複合口縁壷の95は口縁部の屈曲が弱い。96は受口状口縁の壷Ｘである。97・98は外来系土器Ｉ類の壷Ｘで，受口状口縁の外面端部に擬凹線を巡らせている。99～105は長頸壷，長頸壷系の壷である。99～101は小形の長頸壷Ｃで，口縁と体部との境界が不明瞭な99・101，明瞭な100がある。102・103は広口長頸壷で，球形の体部に大きく広がる口縁を付加する。104・105は長

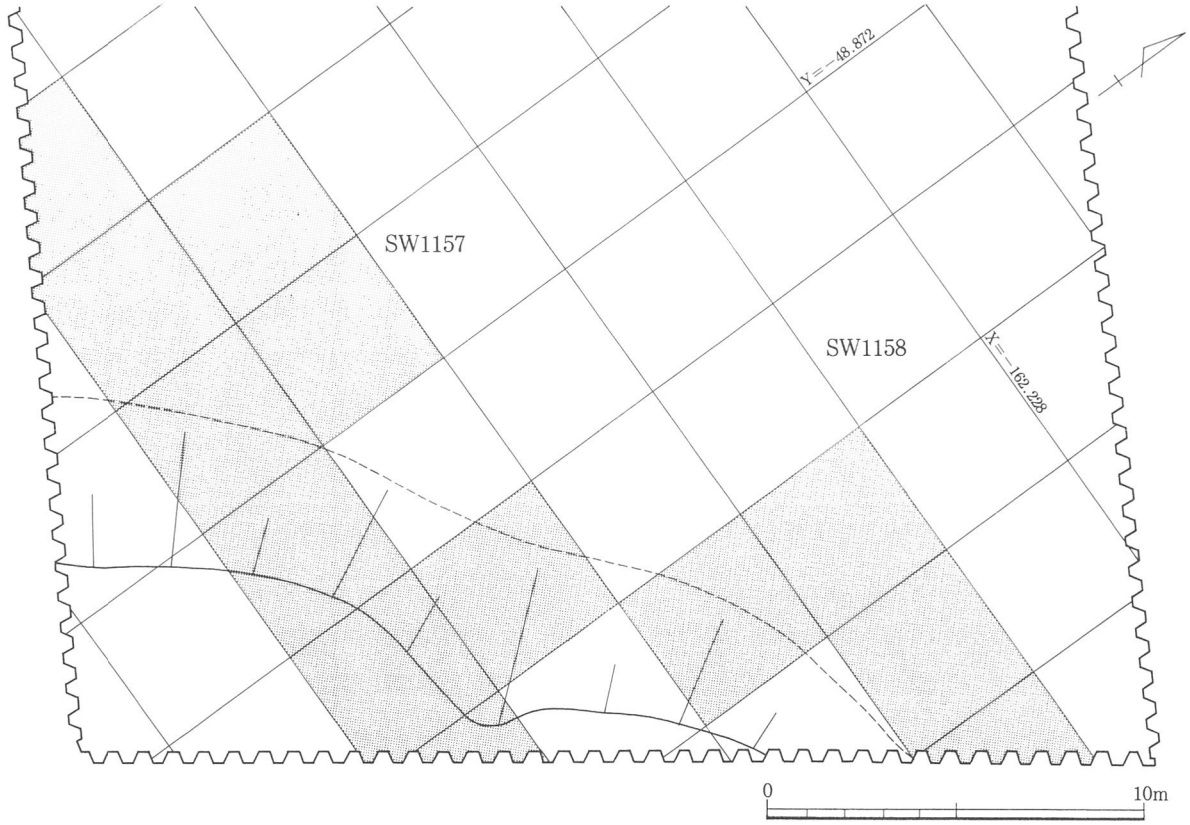


Fig.35　ＳＷ1157・1158平面分布図

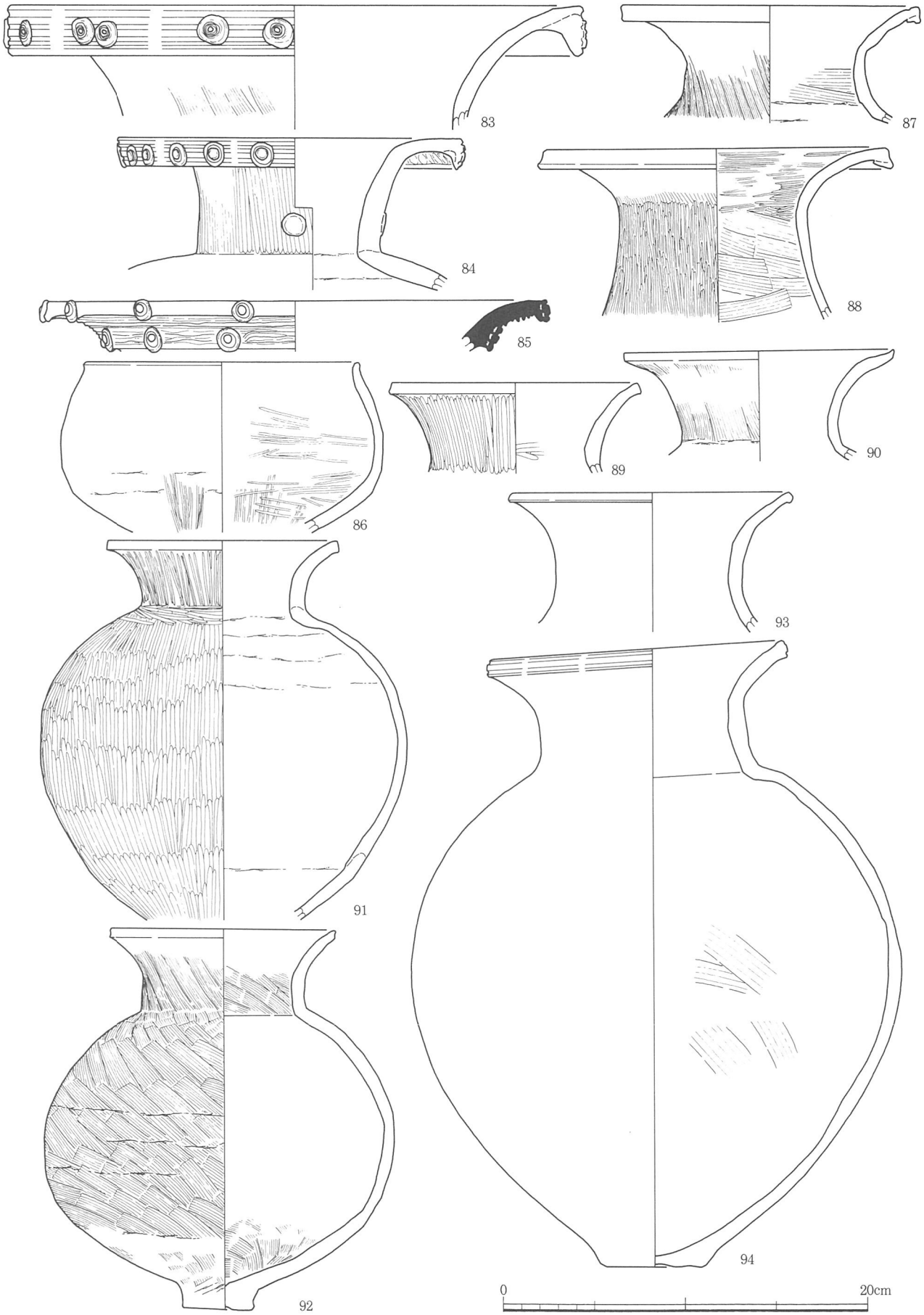


Fig. 36　ＳＷ1157出土遺物実測図（１）

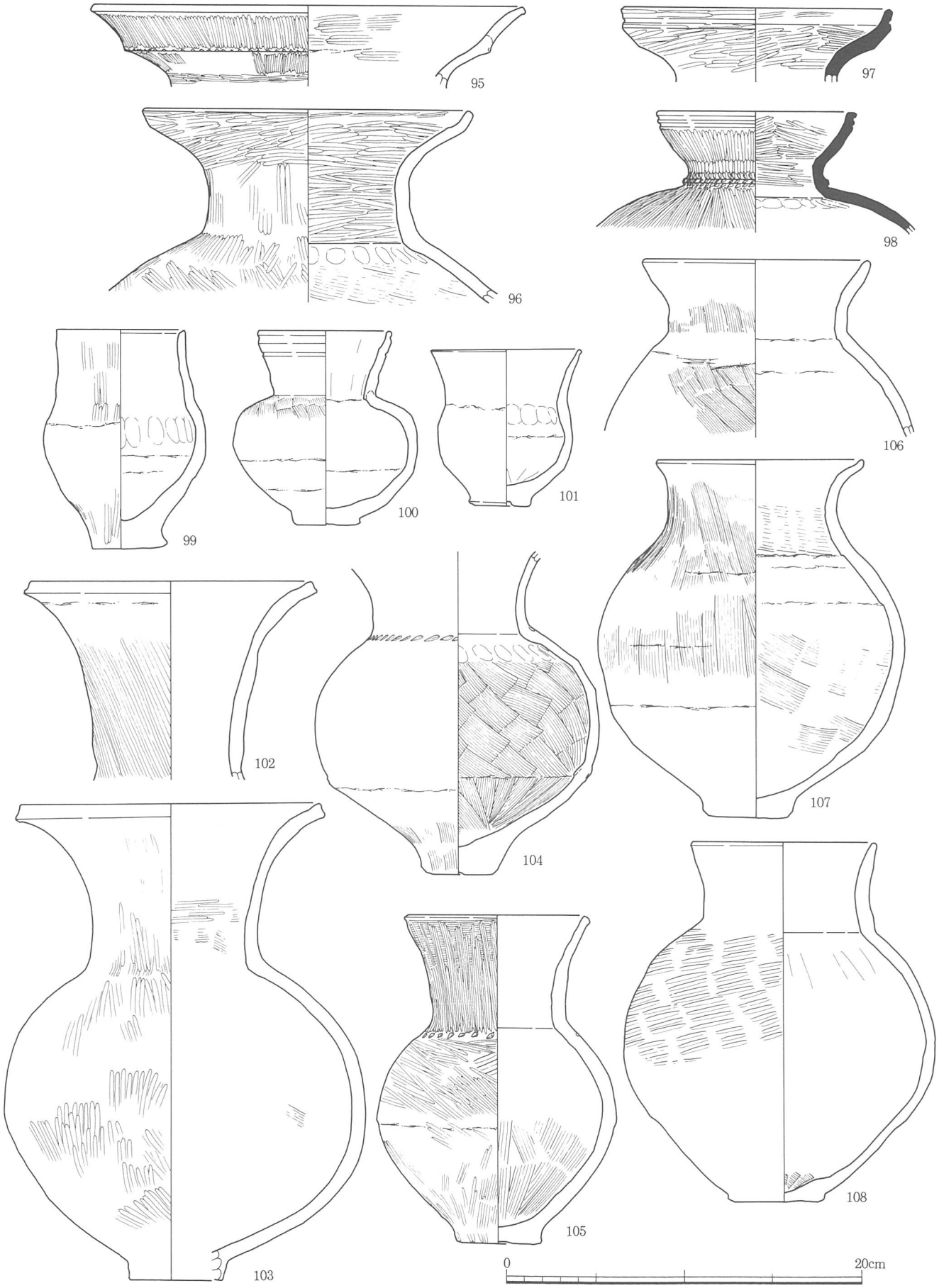


Fig. 37　ＳＷ1157出土遺物実測図（２）

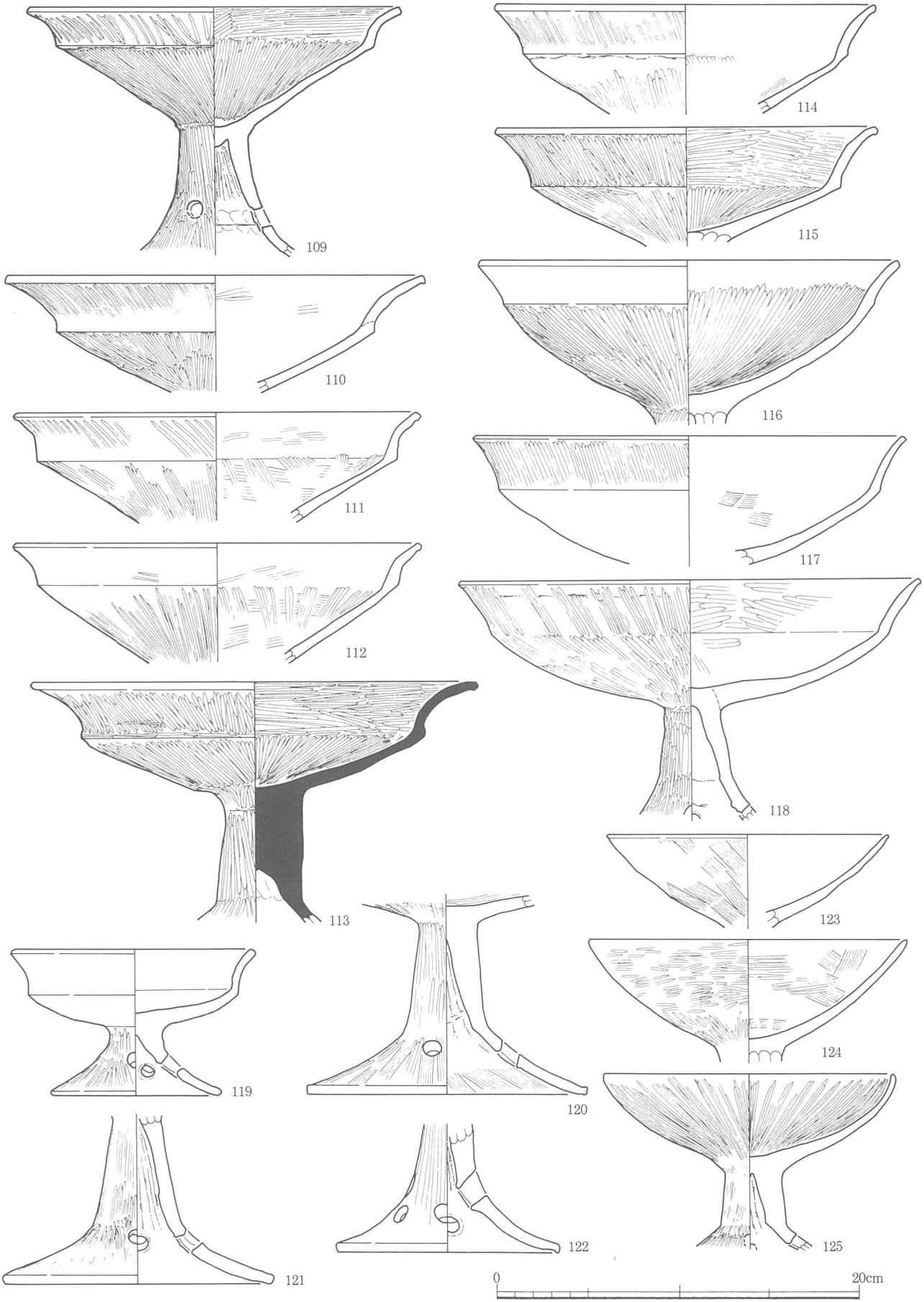


Fig. 38　ＳＷ1157出土遺物実測図（３）

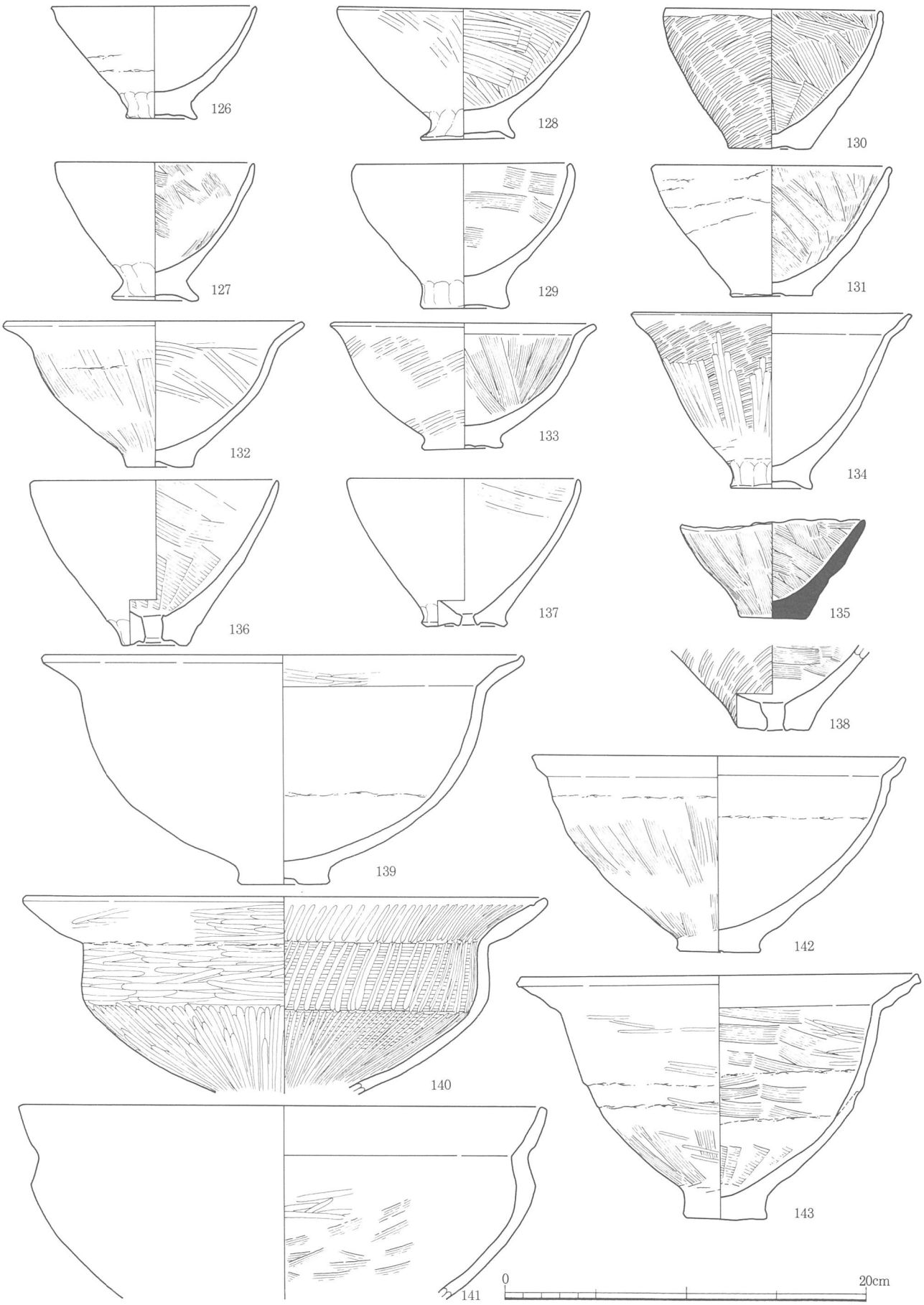


Fig. 39　ＳＷ1157出土遺物実測図（４）

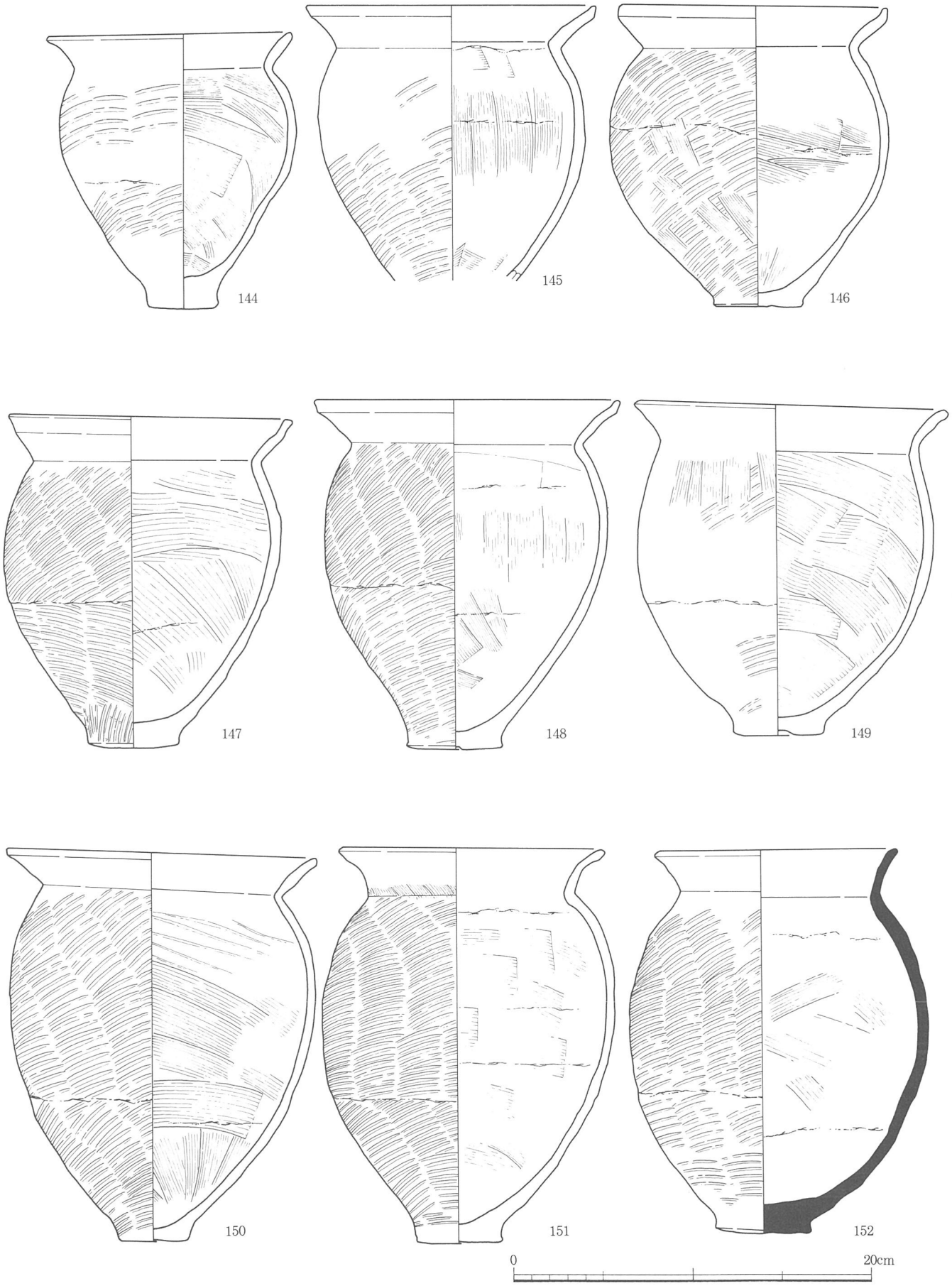


Fig. 40　ＳＷ1157出土遺物実測図（５）

Fig. 41　ＳＷ1157出土遺物実測図（６）

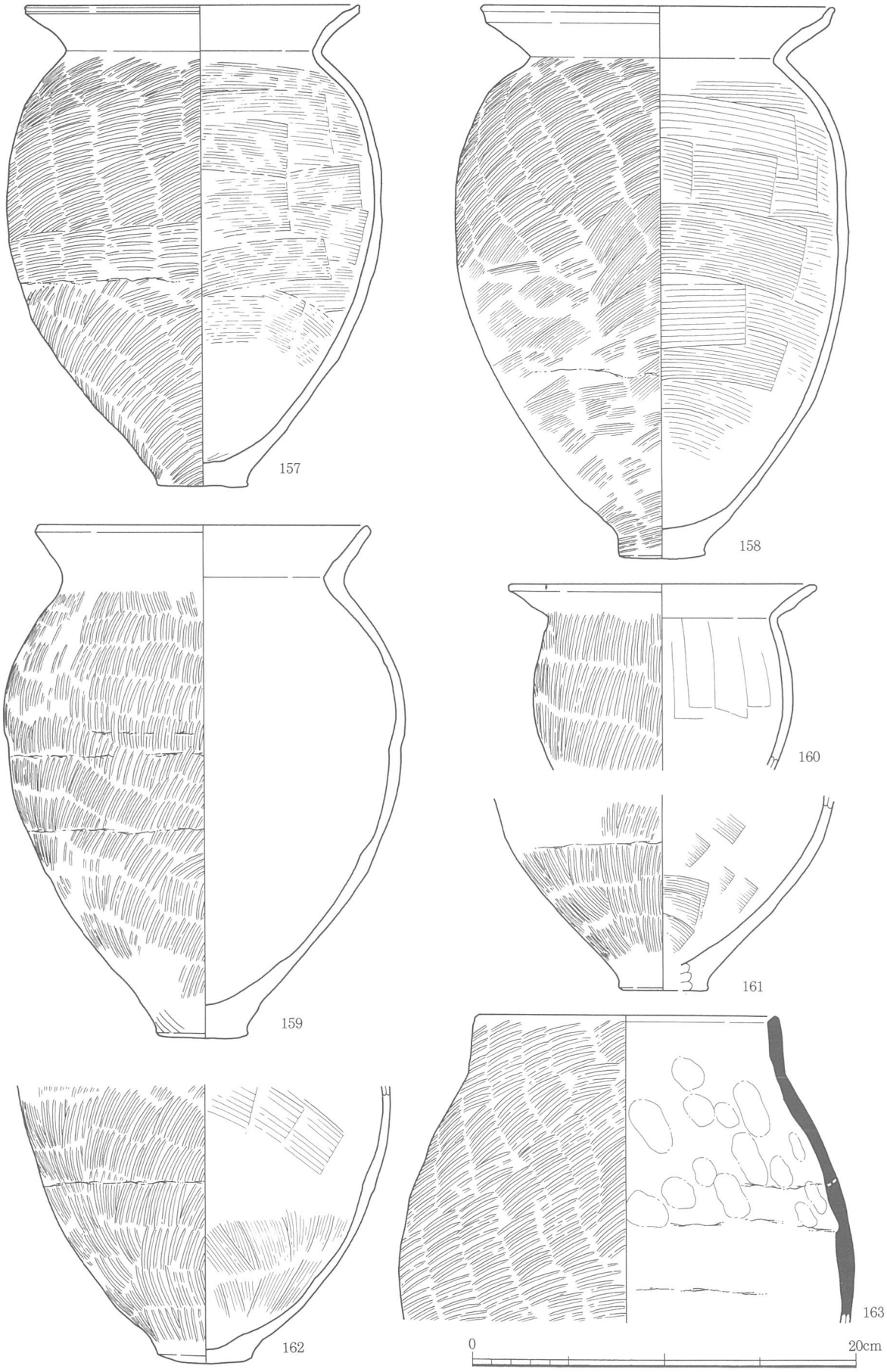


Fig. 42　ＳＷ1157出土遺物実測図（７）

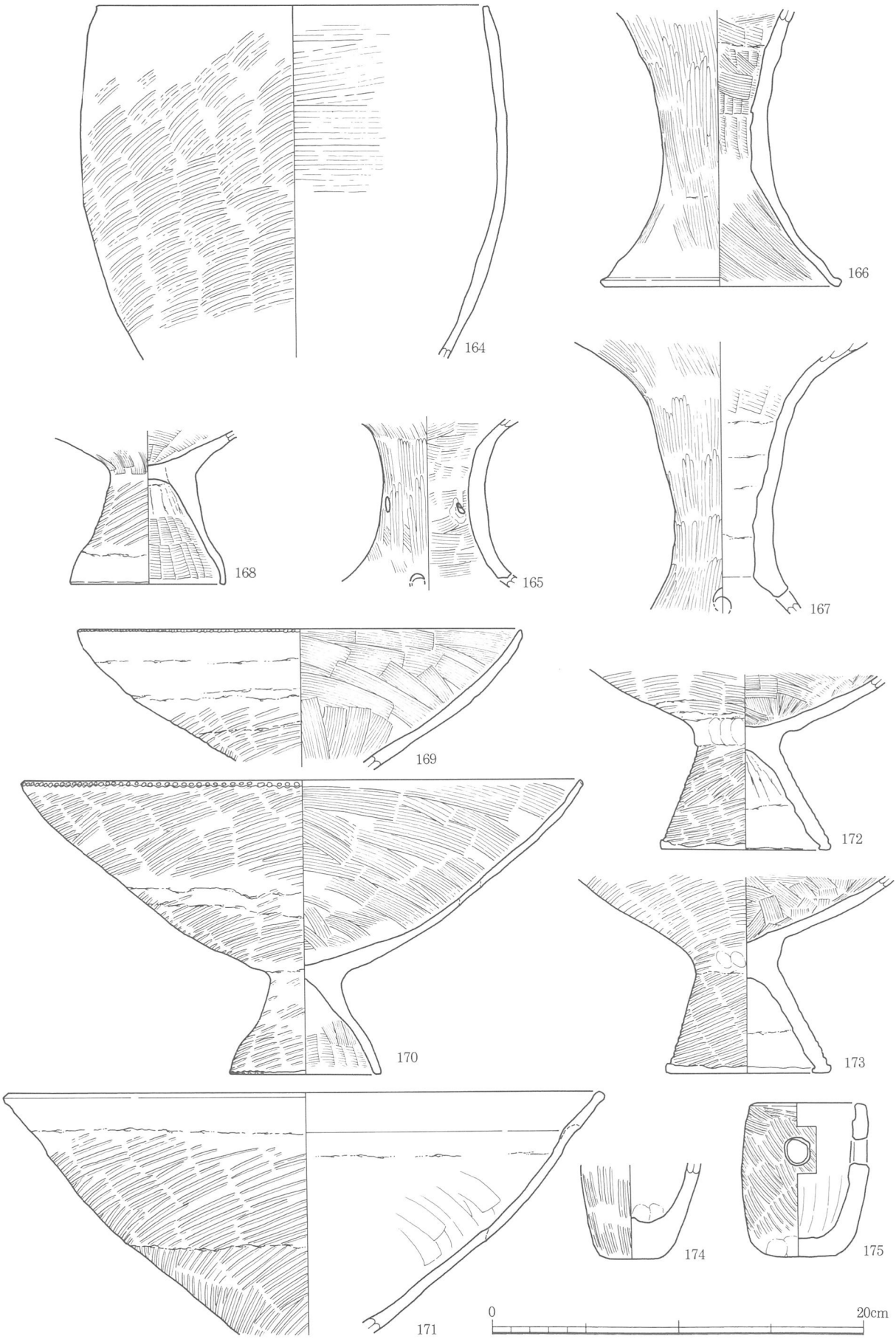


Fig. 43　ＳＷ1157出土遺物実測図（８）

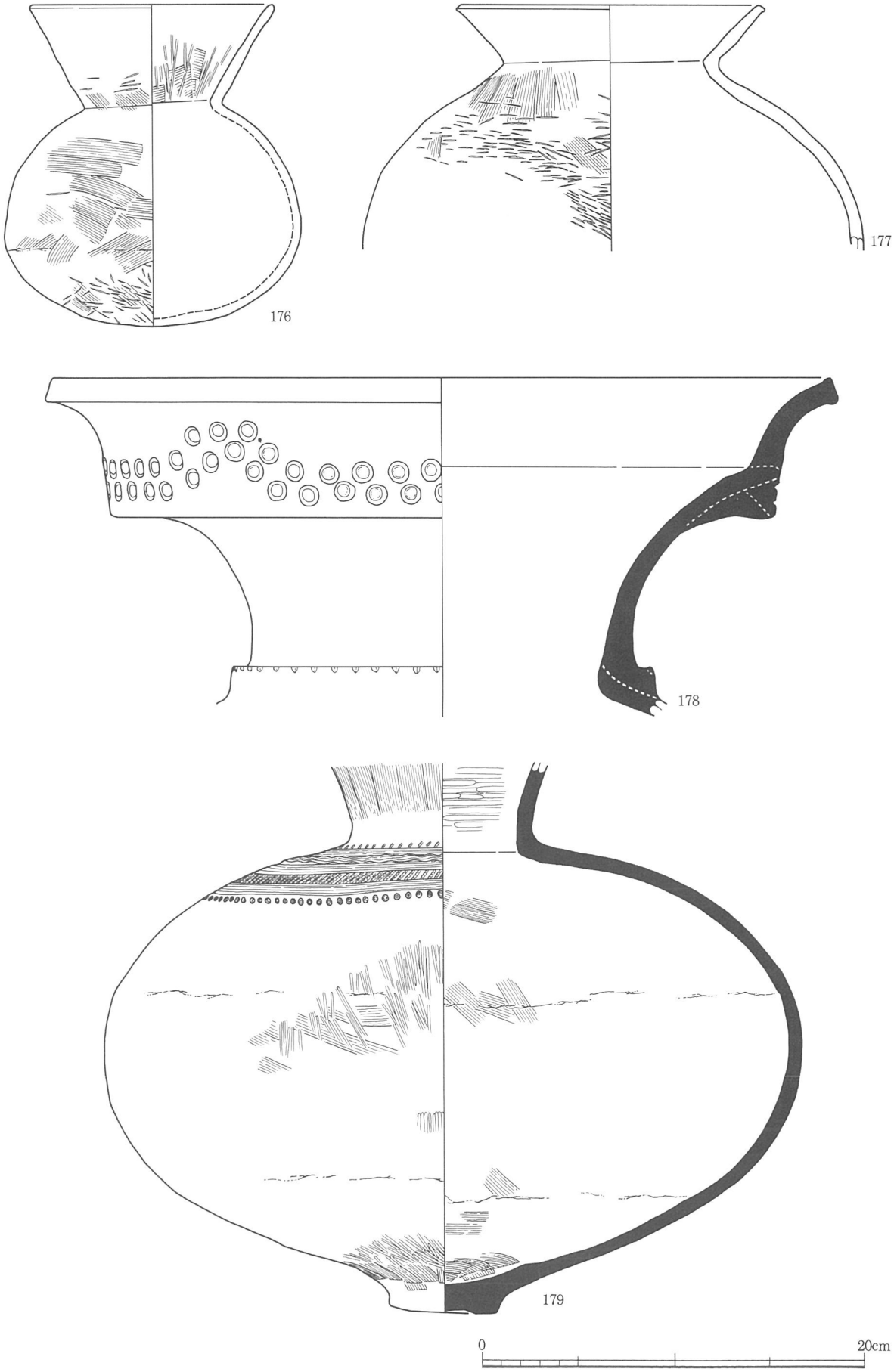


Fig. 44　ＳＷ1158出土遺物実測図（１）

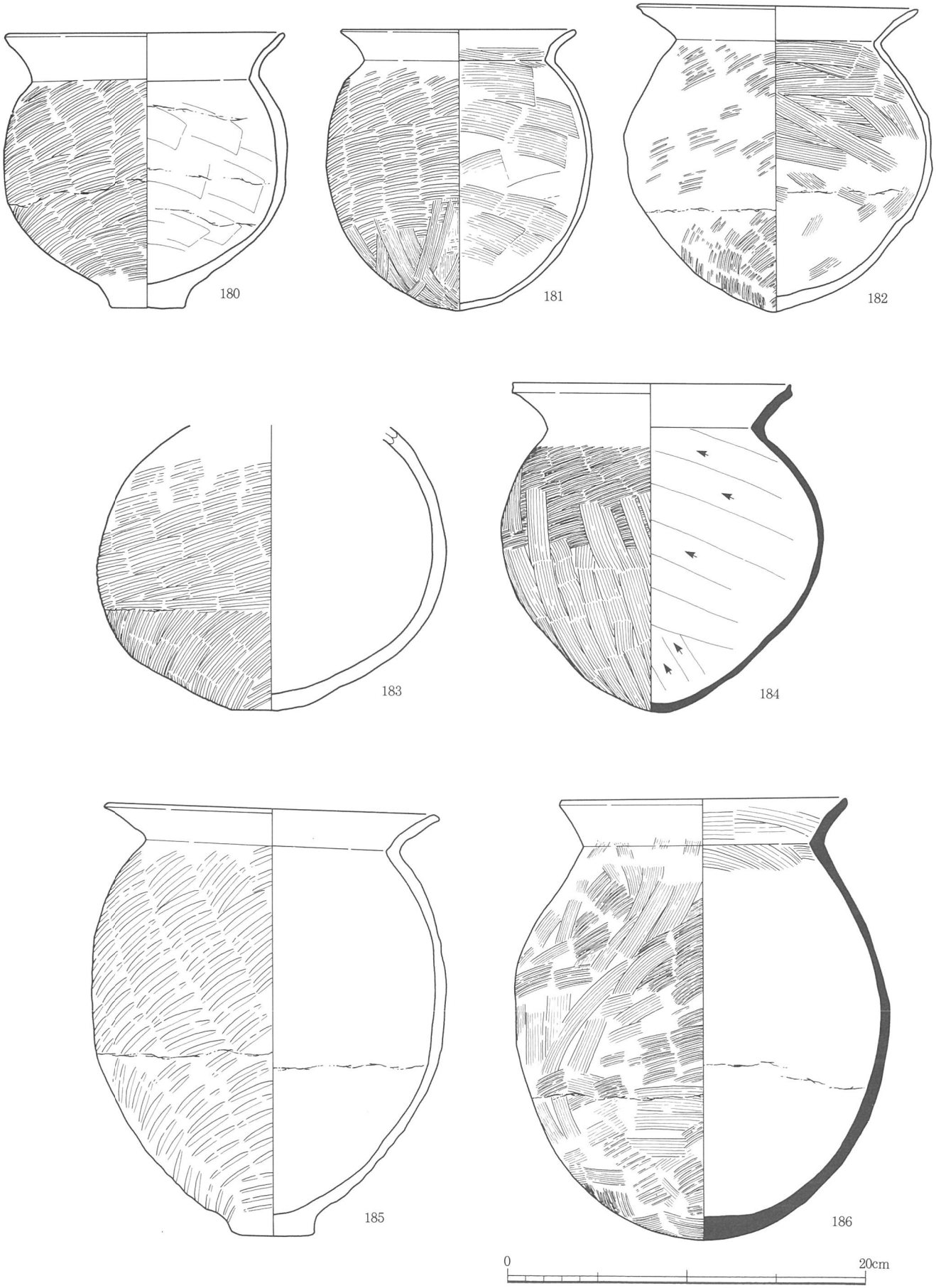


Fig. 45　ＳＷ1158出土遺物実測図（２）

頸壷としてはやや短い口縁をもつ個体で，共に肩部に斜方向の刻目を配する。106～108は短頸壷で，口縁がやや外反する106・107と，口縁が直立して筒状を呈する108がある。

高杯には有稜高杯Ａ(109～118)，低脚の有稜高杯Ｂ(119)，椀形高杯Ａ(123～125)，脚部(120～122)がある。有稜高杯の杯部稜線は，概ね杯部の上位に位置する。稜線の屈曲が強い109～113・115，屈曲がやや甘い114・116～118がある。111～113は胎土が異なり，在来系土器Ⅱ類と思われる。脚部内面は中空の個体が多い。高杯は全般的にミガキＡを主とした最終器面調整を行うが，椀形高杯123はハケ，124はミガキＡを横方向に用いている点，他の個体と異なる。

鉢では126～129が底部形態Ｂの小形鉢Ｂ，130・131が底部形態Ａの小形鉢Ａで，口縁が外反する鉢のうち，132・133が小形鉢Ｃ，134が小形鉢Ｅである。135は生駒西麓産の胎土をもつ河内地域から搬入された小形鉢Ａである。鉢136・137は小形鉢ＡもしくはＢの底部に穿孔した有孔鉢Ａである。138は口縁部を欠いているので全体形状は不明である。中形鉢139～143はいずれも体部から外反する口縁をもつ。体部は半球状のものが多いが，140・141は口縁付近の体部を屈曲させている。

弥生形甕Ａには小形のＡd144から超大形のＡa156まで各種のものがある。また口縁部の形状では，口縁ｃ(147)，口縁ｄ(158)，口縁ｆ(157)，口縁ｇ(153)，口縁ｈ(150)などの多様性に富む。全体の形状は，いずれも倒卵形の体部に突出する平底を備えている。体部の成形は概ね右上がりのタタキ成形を基本としているが，159～162は縦方向のタタキが施された稀少例である。このタタキ痕も右上がりの例と同じく，分割成形による成形第一段階の接合部で，タタキの方向が微妙に食い違っている。大形以上の甕153・154・156・158では口縁部と頸部の接合，あるいは体部の分割成形の接合にタタキの後にハケを用いている。ハケの部分的な併用は中・小形甕の146・149にもみられる。超大形の甕156は，肩部の対向する位置に逆Ｕ字状の把手を設ける。把手の粘土帯は，体部表面をナデた後に直接貼り付けられているので，片側の把手は全く失われている。152は胎土に角閃石を含むことから生駒西麓部からの搬入土器とみられる。163・164はいずれも底部を欠くため全体形状は不明であるが，甕の一種と考えられる。163は口縁部を外折させれば甕の形状になり，164は分割成形の中途段階で製作を終えたかのように，胴部から直立した口縁部を有する。163は生駒西麓産の胎土をもつ河内地域からの搬入土器である。

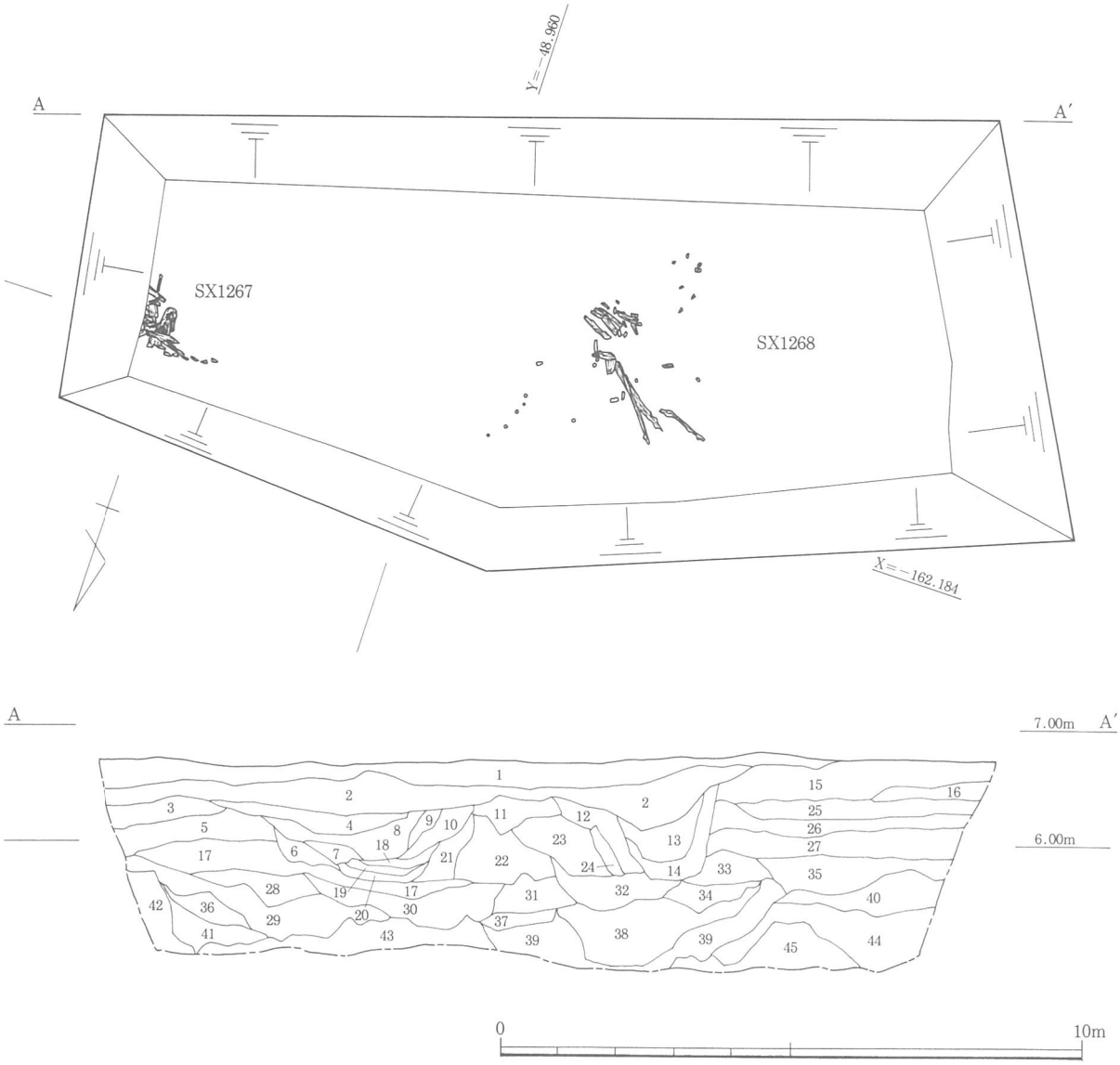
大形器台はいずれも中空で，透孔をもたない166，裾部と柱状部に透孔を設けた165，裾部に透孔を設けた167がある。おそらく165は大形器台Ａ，166・167は裾より口縁が大きく広がる大形器台Ｂである。

168～173は製塩土器Ａである。頑丈な脚台に大きく内湾気味に広がる鉢形の口縁部を備えており，脚台，口縁部共にタタキ技法によって成形されている。口縁部には分割成形の接合痕跡が顕著に残されている。脚台の形態は下半が内湾する168・170と，直線的な172・173があるが，いずれも肉厚で堅牢に作られている。170は口縁端部に細かい刻目を密に施している。いずれも製塩土器によく観察される顕著な焼成痕はみられないが，170では体部のほぼ全面に煤化痕がある。

174・175は蛸壷Ａで，いずれもタタキ成形痕を顕著に残した粗製品である。

２-ｂ．ＳＷ1158遺物(Fig.44・45，PL.71)

河道左岸から回収された土器のうち，新相を示すものとして分離抽出を行った土器は壷(176～179)，甕(180～186)であり，個体数は比較的少ない。壷には小形の直口壷176，甕類似形態で体部をミガキＢで仕上げた壷Ｘ177，超大形の複合口縁壷178，加飾性の壷Ｘ179がある。178は口縁部に竹管紋を波状に配し，頸部に刻目を刻んだ貼付突帯を有する。結晶片岩を含む外来系土器Ⅰ類である。179は口縁を欠損するが，肩部に列点紋・直線紋・波状紋・竹管紋を配し加飾性に富んだ壷である。甕には弥生形甕



1　灰色（5Y5/1）粘土質微砂
2　灰色（5Y4/1）粘土質微砂
3　灰オリーブ色（5Y6/2）粘土質微砂
4　灰色（10Y4/1）粘土質微砂
5　青灰色（5B6/1）粘土質微砂
6　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂
7　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂（炭化物含む）
8　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂（炭化物多量に含む）
9　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
10　緑灰色（10GY5/1）粘土
11　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂
12　暗緑灰色（10GY4/1）粘土（炭化物含む）
13　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土質微砂（土器片・炭化物含む）
14　灰色（10Y4/1）粘土質微砂
15　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
16　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂
17　灰色（10Y5/1）粘土質微砂（土器片・木片含む）
18　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂（炭化物含む）
19　灰色（7.5Y4/1）粘土質微砂（炭化物・土器片含む）
20　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）（木片・炭化物含む）
21　灰色（10Y4/1）粘土（炭化物含む）
22　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂
23　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂
24　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂（炭化物含む）
25　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
26　暗緑灰色（10GY4/1）粘土
27　オリーブ灰色（10Y5/2）粘土
28　暗緑灰色（10GY4/1）粘土
29　暗緑灰色（10GY4/1）粘土
30　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂・中礫（木片含む）
31　中礫
32　暗オリーブ灰色（2.5Y4/1）細砂（木片含む）
33　青灰色（5BG5/1）粘土質微砂（土器片含む）
34　暗緑灰色（10GY4/1）粘土質微砂
35　緑灰色（10GY6/1）粘土
36　暗緑灰色（10GY4/1）粘土・中礫
37　暗緑灰色（10GY4/1）粘土・細砂
38　緑灰色（10GY6/1）粘土質微砂
39　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂（木片含む）
40　緑灰色（10GY5/1）中砂
41　灰色（10Y4/1）粘土
42　緑灰色（10G5/1）粘土
43　緑灰色（10GY5/1）粘土
44　オリーブ灰色（2.5GY5/1）中砂（木片含む）
45　緑灰色（10GY5/1）粘土

Fig. 46　ＮＲ1207平面図・断面図

180～183・185，庄内式甕184，外来系土器Ⅰ類と考えられる甕Ｘ186がある。180・185の弥生形甕は伝統的な形態を保持するが，181～183は体部の球形化，尖底・丸底化が進行している。特に182は内面ケズリを欠くため弥生形甕Ｂに含めないが，その形態は明らかに庄内式甕を模倣している。184は通有の形態をした庄内式甕Ａである。186はタタキ成形後，斜・横方向のハケを加えた長胴傾向の丸底の甕Ｘで，形態や調整から在来系土器の系統ではなく，搬入品の可能性が高い。

ＮＲ1207

１．遺構(Fig.46，PL.４)

Ａ－２区検出の河道である。この地区は矢板を打設せず素掘りを行ったので，トレンチ調査によって部分的にその存在が確認されたにとどまる。トレンチはＡ－２区の南端付近に，７ｍ×15ｍの範囲でほぼ東西方向に設定したが，その全面に粘土・微砂・細砂の流水堆積がみられ，河道痕跡と判断した。また深さ1.8ｍで掘削されたトレンチ底には，東端と中央部に木杭が打設されていた。これらを柵(しがらみ)様の遺構とみなし，前者をＳＸ1267，後者をＳＸ1268とする。検出範囲が限られ，河道の全体的な規模や流路方向は明らかにできなかった。また柵の形成時期も不明である。トレンチを設定した北側には，河道より上層に水田ＳＸ1269～1274が検出されているが，水田址の下層まで流路が及んでいる可能性が大きい。

２．遺物(Fig.47)

堆積土中からは壷(187)，高杯(188・189)，器台(190)，甕(193・194)，鉢(191)，脚台(192)が出土しているが，概して量的には少ない。187の複合口縁壷は，口縁部下端に竹管紋を押捺した円形浮紋を２個一対，一定間隔で配置する。高杯はいずれも有稜高杯Ａである。188は稜線の屈曲が強く，また189は口縁が直線的で稜線が下がった位置にある。器台190は口縁部と脚裾に段を有する有段器台で，柱状部だけが出土している。193は布留式祖形甕，194は庄内式甕Ａである。191の鉢はタタキ成形によるもので，192の脚台の器種は不明である。庄内式併行期中～新段階の遺物を主体とする。

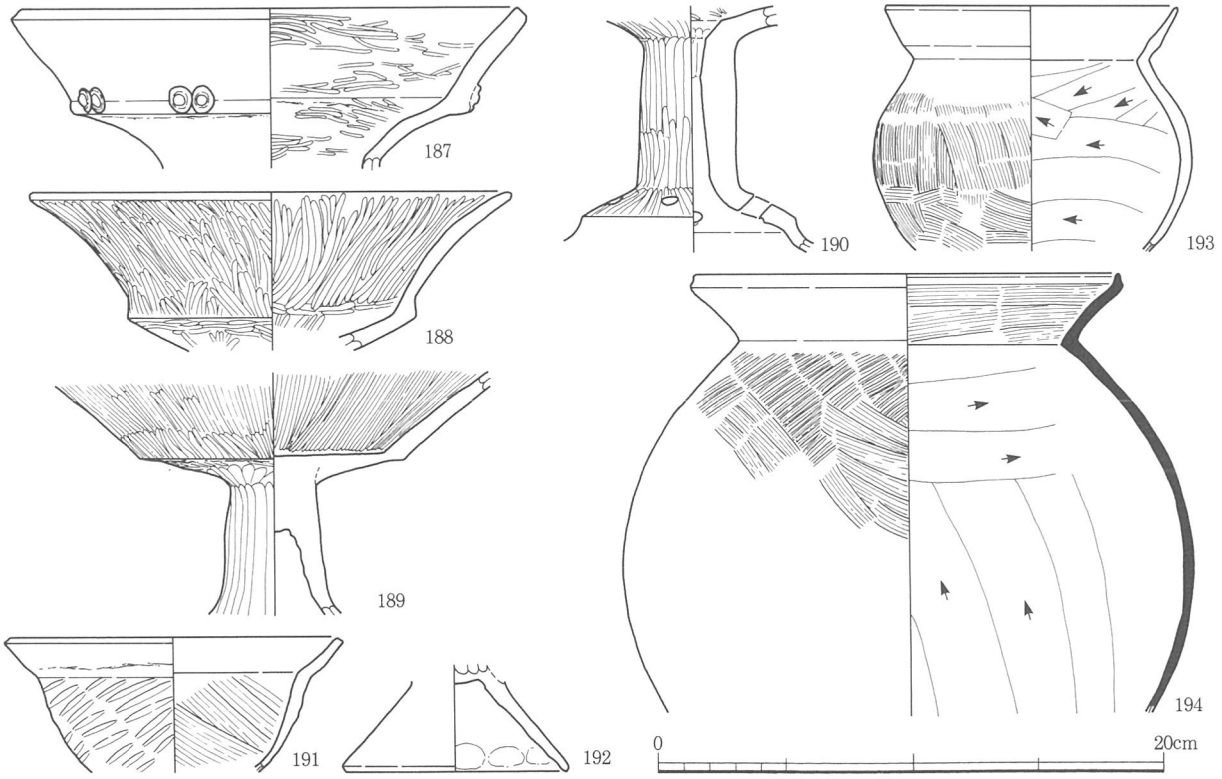


Fig.47　ＮＲ1207出土遺物実測図

ＳＸ1267

遺構(Fig.48, PL.４)

トレンチの北東部で検出された木杭列で，柵(しがらみ)と考えられる。検出標高は5.4m前後である。トレンチの端に位置していたため，全体の状況は不明で検出範囲外に及ぶ可能性もある。少なくとも検出範囲内では河道の砂層中に木杭が東西1.3m，その東端から南へ1.3mと，Ｌ字状に連続的して打設されていた。この検出状況から柵以外の施設の可能性も疑われたが，掘形などは全く認められなかったため，柵として取り扱っている。木杭は長さ120㎝，幅10㎝前後の板状に作られており，先端部は削られ尖っている。Ｌ字状の平面形を呈する柵本体の隅には，大小数片の自然木の破片がみられた。形成時期は不明。

ＳＸ1268

遺構(Fig.49, PL.４)

トレンチのほぼ中央部で検出された柵(しがらみ)で，検出標高は5.4m前後である。河道の砂層中に打設された木杭列で，木杭は樹枝の丸材をそのまま用いるか，あるいは木材をみかん割りした材が用いられており，いずれも先端を削って尖らせている。木杭の長さは長短不揃いで，最長で約60㎝である。その配列は概ね北東～南西方向に分布をみせるが，かなり疎らな状況であって，顕著な規則性は認められない。以上のように，木杭の形状と打設の状況がＳＸ1267と大幅に異なっており，この両者の形成時期が異なる可能性を残している。柵の周囲には数本の自然木がみられたが，流木が柵に漂着したものかも知れない。形成時期は不明である。

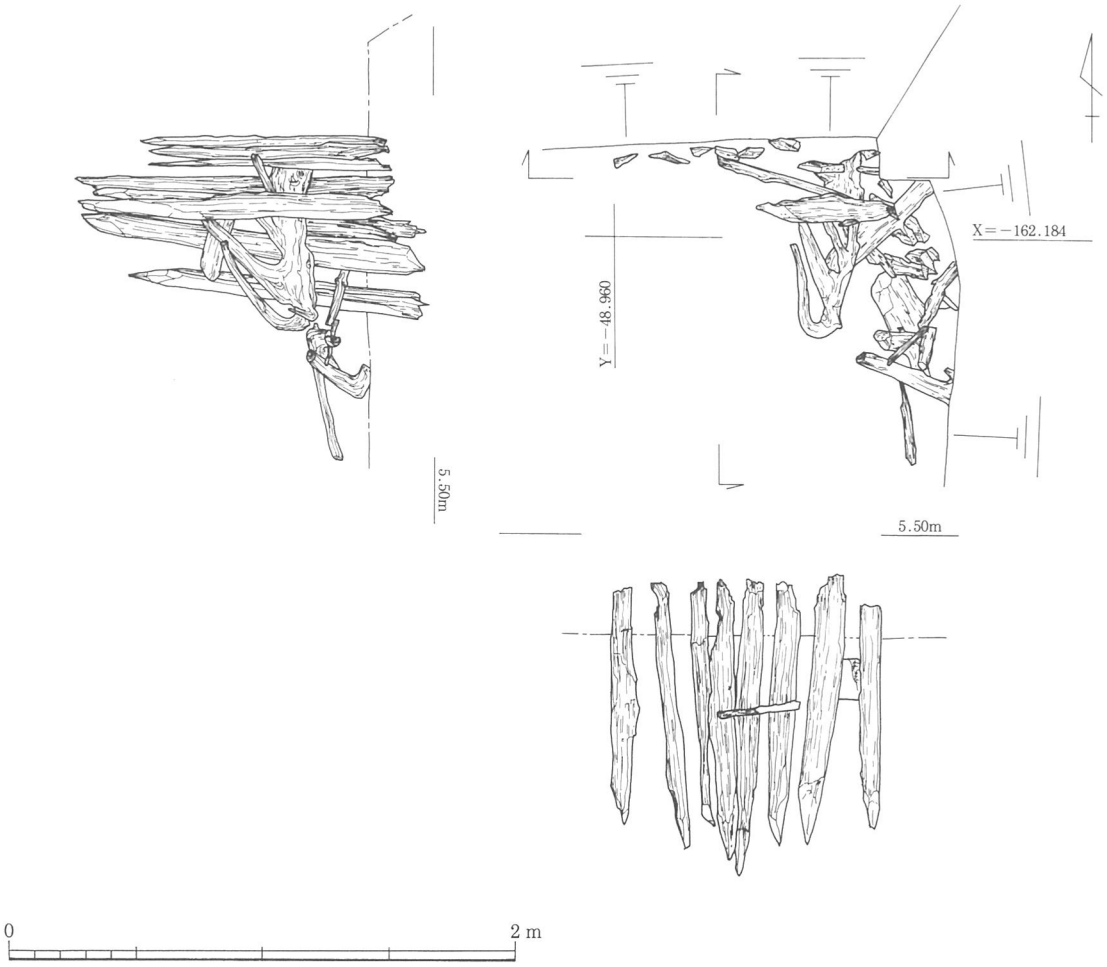


Fig.48　ＳＸ1267平面図・立面図

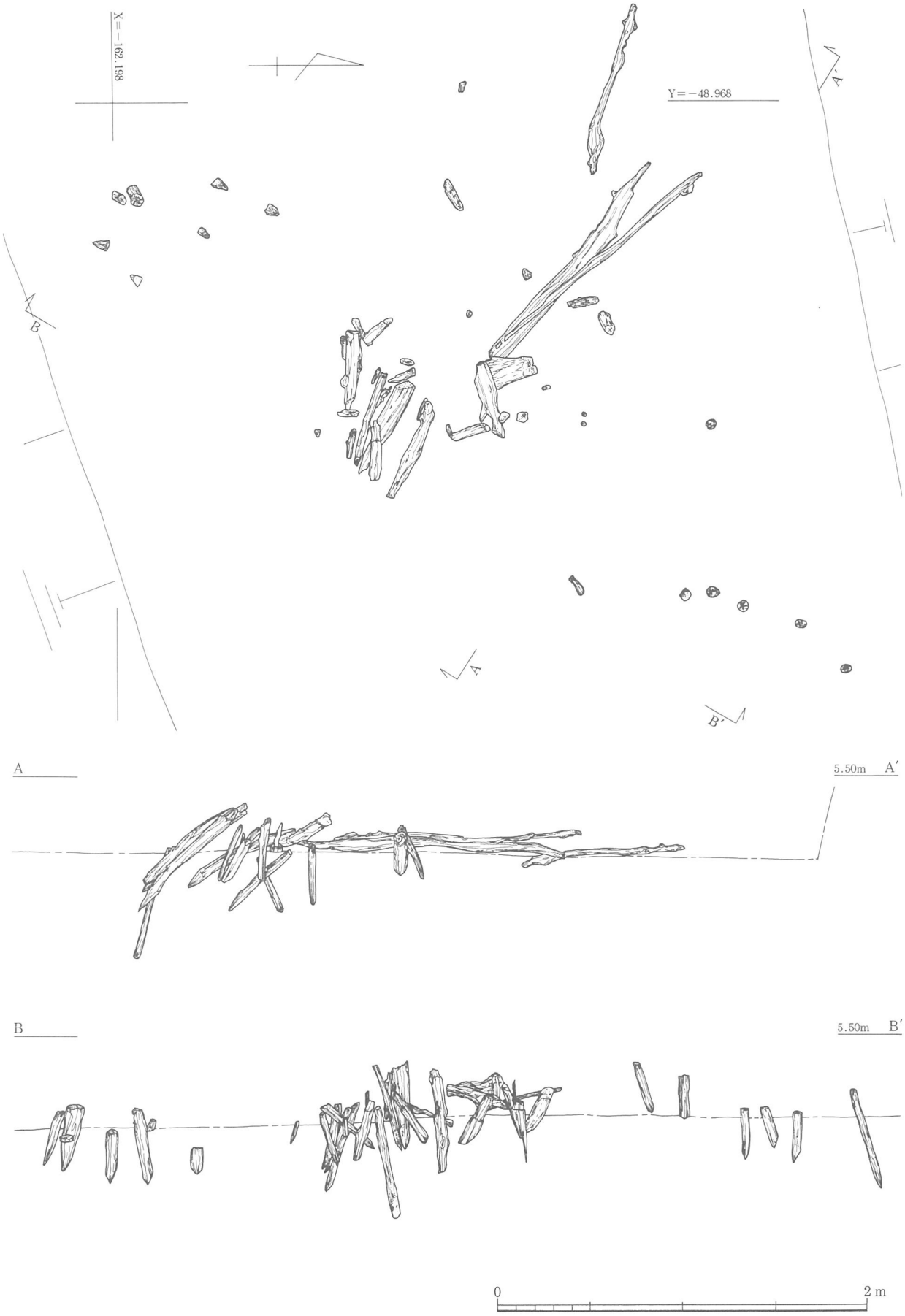


Fig. 49　ＳＸ1268平面図・立面図

ＮＲ2109

１．遺構(Fig.50，PL.５)

Ｂ－１区を南北に横断する河道である。この地区では部分的に矢板を打設して調査を行ったが，安全面から全面的な検出は行い得ず，肩部の検出とトレンチ調査による部分的な川底の確認に留まった。全長約28ｍの部分が検出されており，川幅は約27ｍ，深度は約４ｍ以上である。流路の方向はほぼ南北で，南から北への流水があったものと考えられる。河道の東側，すなわち右岸では幅６ｍ，深さ1.5ｍの小さな支流がほぼ直角に合流している。河道はⅥ層を切り込んで形成されており，またＡ区でみられたような重複する河成堆積物の存在は認められなかった。河道内堆積土は粗砂・細砂・微砂などで構成されており，検出面から１ｍ以上の深さの層位から須恵器，土師器など多量の土器が検出された。出土土器量は須恵器が最も多く，土師器がこれに次いでおり，その他，中・後期弥生土器が僅かに認められた。ＮＲ2109の形成時期は不明であるが，河道の東岸は遺構がほとんど認められないのに対し，西岸には弥生時代後期～庄内式併行期の各種遺構が分布することから，河道が集落域を限っていたと考えられる。このことから，少なくとも弥生時代後期には河道が存在していた可能性が高い。また，河道がほぼ完全に埋没するのは出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

２．遺物(Fig.51～53，PL.72～74)

出土遺物には中・後期弥生土器，須恵器，土師器があるが，須恵器と土師器を取り上げる。須恵器には初期須恵器も含まれるが中～後期が主体である。器種は杯蓋(195～209)，杯身(210～226)，把手付椀(227)，鉢(228)，高杯(229～233)，瑕(234～236)，壺(237～239)，器台(240～242)などがある。

杯蓋はいずれも口縁部と天井部の境界に明瞭な稜線を有する。天井部は1/2以上の広い範囲で回転ヘラケズリを加えた個体が多く，また天井部に丸味をもつものが大半を占める。口縁端部の作りには，内傾する凹面をもつ196～204・206～209，丸くおさめる195，弱い端面をもつ205がある。

杯身の回転ヘラケズリの範囲は杯蓋と同様に1/2以上に行われ，底部に丸味を帯びた個体が大半であるが，221は静止ヘラ起こし未調整の底面をもち，粘土紐巻上げ痕を残す。口縁端部の作りは，内傾する凹面をもつ210・211・213・214・216～222・224，丸くおさめる212・215・223，弱い端面をもつ225・226がある。口縁の立ち上がりはやや外反気味に内傾する個体を主とするが，213は「く」の字状に強く屈曲している。213・222の底部にはＸ字状のヘラ記号がある。

把手付椀227は静止ヘラケズリで仕上げた平底と，短い樽状の体部をもつ。口縁部の直下には緩やかな凸線が巡らされ，体部と区画されている。口縁直下から体部下端に至る断面円形の把手が装着されるが，現状では基部を除いて失われている。

鉢228はナデ仕上げの平底に，ほぼ直立する体部をもつ。

230～232は有蓋高杯である。230・231は低脚で，230は円形透孔，231は三角形透孔を穿つ。232は長脚の高杯で長方形透孔をもち，脚部にカキメを有する。233は無蓋高杯である。

瑕には小形の234・235，大形の236がある。234は底部に平行タタキ痕を残す。肩の張りが強く，肩部と口頸部外面に波状紋が巡る。235は遺存状態が不良で，調整の細部は不明である。236の口縁部は明瞭な凸線によって２段に区画され，口頸部外面に波状紋を施す。肩部は強く張り出し，上下２条の凹線を設けて紋様帯とし，内部に波状紋が巡る。底部周辺には平行タタキ痕を残す。

壺のうち237は瑕の口縁の可能性がある。直線的に広がる口縁部は凸線によって上下に区画され，それぞれに波状紋を施す。238は大きく広がる口縁部をもち，口縁端部をやや肥厚させて凹んだ端面を設

1 オリーブ黄色(5Y6/3)微砂
2 暗灰黄色(2.5Y5/2)微砂
3 灰黄色(2.5Y6/2)微砂・粗砂
4 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗砂
5 にぶい黄褐色(10YR4/3)微砂
6 黒褐色(2.5Y3/2)微砂
7 にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂
8 黒褐色(10YR3/2)粘土質微砂
9 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土
10 にぶい黄色(10YR5/3)微砂
11 暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂
12 オリーブ褐色(2.5Y4/3)微砂
13 にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂
14 黄褐色(2.5Y5/4)微砂
15 黄褐色(2.5Y5/3)微砂
16 灰黄色(2.5Y5/2)微砂
17 にぶい黄色(2.5Y6/3)微砂
18 黄褐色(2.5Y5/3)細砂
19 灰黄色(2.5Y6/2)微砂
20 黄褐色(10YR5/8)微砂
21 オリーブ黄色(5Y6/3)細砂
22 灰オリーブ色(5Y5/3)細砂
23 灰黄褐色(10Y5/2)粘土
24 にぶい黄色(2.5Y6/3)細砂
25 にぶい黄褐色(10Y5/3)細砂
26 暗オリーブ灰色(5G4/1)粘土
27 黄褐色(2.5Y5/3)細砂
28 灰黄色(2.5Y6/2)細砂
29 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂
30 灰オリーブ色(5Y6/2)細砂
31 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土
32 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土
33 灰オリーブ色(7.5Y5/2)細砂(木片含む)
34 オリーブ灰色(7.5Y5/2)細砂(流木・木片・木葉多量に含む)
35 オリーブ灰色(10Y6/2)細砂(木片含む)
36 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土
37 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂
38 褐色(10YR4/4)微砂
39 灰オリーブ色(5Y6/2)細砂
40 灰オリーブ色(7.5Y5/2)細砂
41 オリーブ灰色(5GY5/1)微砂
42 オリーブ灰色(2.5GY6/1)細砂(流木含む)
43 灰色(7.5Y5/2)粘土
44 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂(木片少量含む)
45 暗緑灰色(10GY4/1)微砂(木片多量に含む)
46 灰オリーブ色(5Y5/3)細砂(流木多量に含む)
47 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中礫
48 灰色(5Y4/1)粗砂(流木含む)
49 オリーブ灰色(7.5Y5/3)微砂・粘土質微砂のラミナ
50 青灰色(5BG5/1)微砂・細砂のラミナ
51 灰オリーブ色(5Y5/2)微砂
52 褐色(10YR4/6)細砂(鉄分沈着)
53 灰色(5Y5/1)微砂
54 灰色(10Y6/1)微砂・粘土・粘土質微砂のラミナ(木片含む)
55 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土
56 暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂
57 オリーブ灰色(5GY5/1)細砂・粘土質微砂のラミナ
58 灰色(7.5Y5/2)微砂・粘土質微砂のラミナ
59 灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質微砂
60 灰オリーブ色(7.5Y6/2)細砂
61 オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗砂
62 黄褐色(2.5Y5/6)粗砂・中礫
63 灰オリーブ色(5Y5/3)粗砂・中礫
64 オリーブ灰色(2.5GY5/1)細砂・極粗砂
65 暗緑灰色(10GY4/1)粘土質微砂・細砂のラミナ(木片少量含む)
66 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粗砂
67 暗緑灰色(10GY4/1)粘土質微砂・細砂のラミナ(木片少量含む)
68 灰オリーブ色(5Y6/2)細砂
69 黄褐色(2.5Y5/4)細砂
70 オリーブ灰色(5GY6/1)細砂
71 灰オリーブ色(7.5Y5/2)細砂
72 灰オリーブ色(7.5Y5/2)粗砂・中礫
73 灰オリーブ色(7.5Y6/2)細砂
74 灰オリーブ色(5Y5/2)極粗砂・細礫のラミナ
75 オリーブ灰色(10Y4/2)粗砂
76 暗緑灰色(5G4/1)粘土質微砂・細砂のラミナ
77 灰黄褐色(10YR5/2)細砂
78 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂
79 灰オリーブ色(7.5Y5/2)細砂
80 暗灰黄色(2.5Y4/2)微砂
81 黒褐色(2.5Y3/2)微砂
82 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細砂
83 灰オリーブ色(5Y4/2)細砂
84 黒色(2.5GY2/1)粘土質微砂(流木多量に含む)
85 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)微砂
86 暗緑灰色(10GY4/1)粘土
87 オリーブ灰色(5GY5/1)微砂
88 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土質微砂
89 明黄褐色(10YR6/6)粗砂・細砂のラミナ
90 灰色(7.5Y5/1)粗砂
91 オリーブ灰色(2.5GY5/1)細砂
92 オリーブ灰色(2.5GY6/1)微砂
93 オリーブ灰色(10Y6/2)粗砂・細砂のラミナ
94 灰色(10Y5/1)粗砂
95 灰色(7.5Y5/1)粗砂
96 オリーブ黒色(10YR3/2)極細砂
97 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粗砂・細礫(流木多量に含む)
98 オリーブ灰色(10Y4/2)粗砂
99 暗緑灰色(7.5GY4/1)細砂・木片のラミナ
100 緑灰色(10GY5/1)微砂・木片のラミナ
101 暗緑灰色(10GY4/1)粘土質微砂・細砂
102 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土質微砂(木片少量含む)
103 オリーブ灰色(10Y4/2)細砂・粘土質微砂のラミナ
104 オリーブ灰色(5GY5/1)粗砂(流木含む)
105 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土
106 青灰色(10BG5/1)粘土質微砂
107 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土
108 灰色(10Y4/1)粘土
109 暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土・細砂のラミナ
110 暗緑灰色(10GY4/1)細砂・粘土のラミナ
111 暗緑灰色(10G4/1)粗砂(木片多量に含む)
112 褐色(7.5YR4/4)微砂
113 灰黄褐色(10YR4/2)微砂
114 灰黄褐色(10YR5/2)微砂
115 灰色(10Y4/1)微砂
116 灰色(7.5Y4/1)粘土(炭化物含む)
117 灰色(5Y4/1)粘土(炭化物含む)
118 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土(炭化物含む)

Fig. 50　ＮＲ2109平面図・断面図

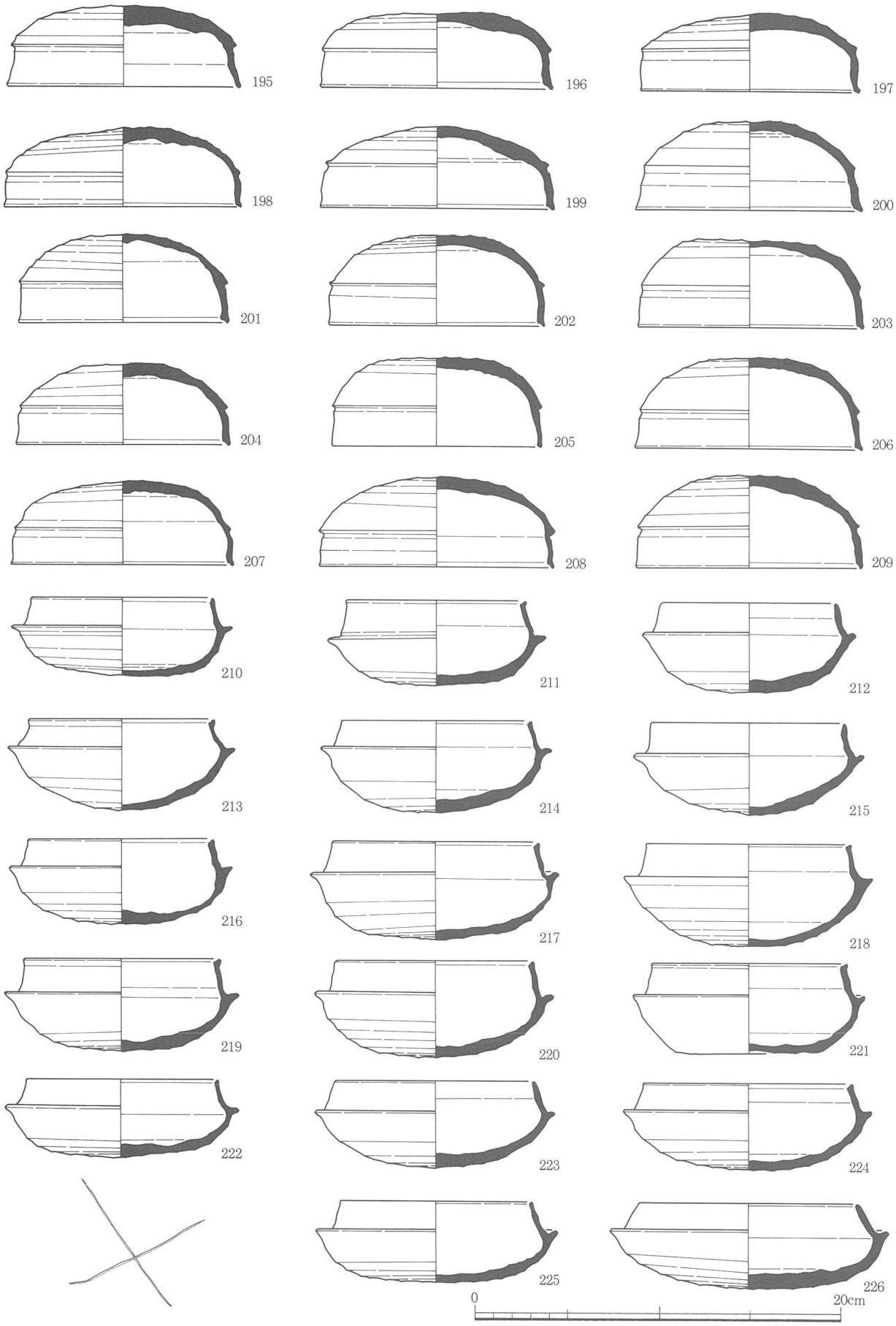


Fig. 51　ＮＲ2109出土遺物実測図（１）

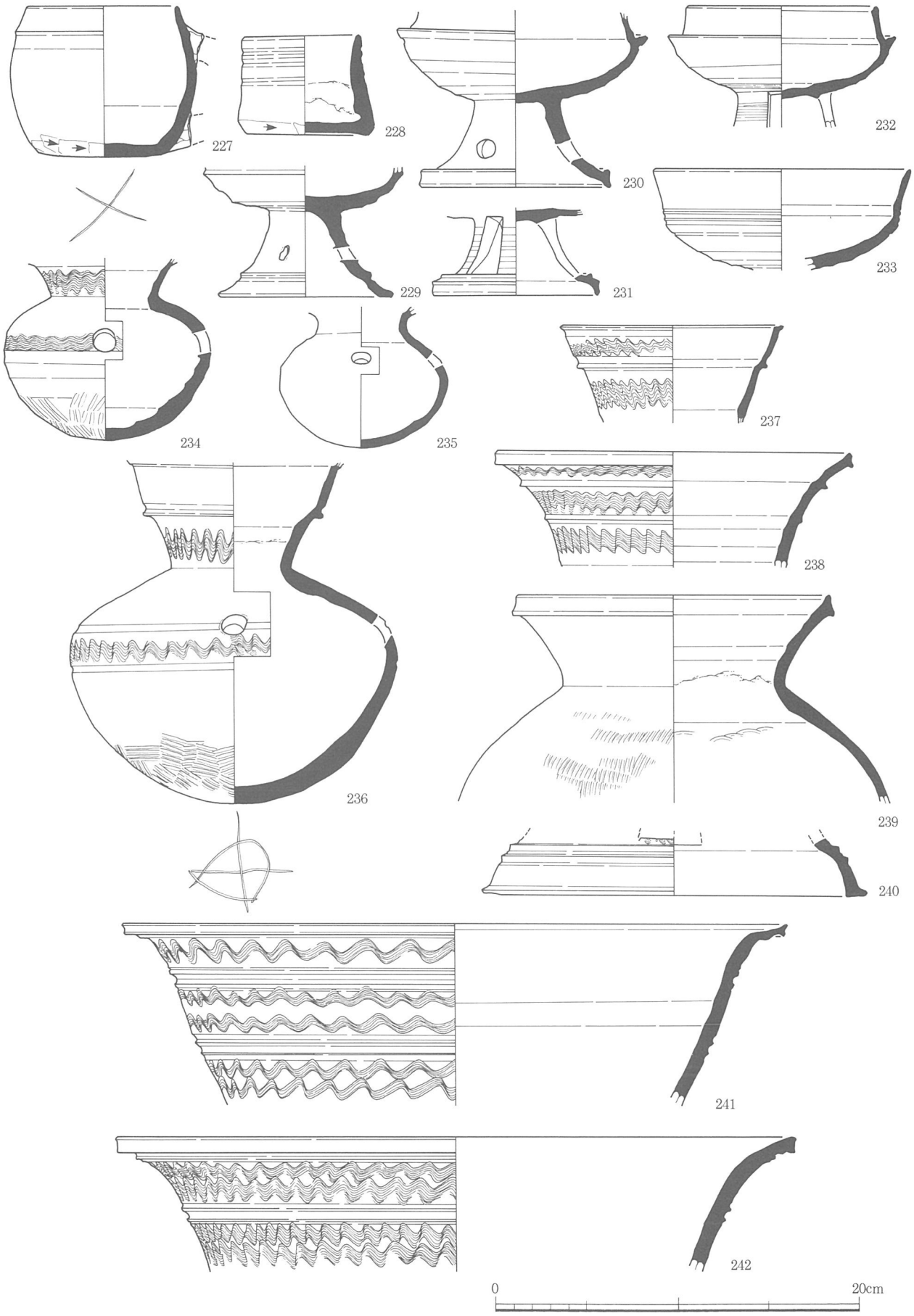


Fig. 52　ＮＲ2109出土遺物実測図（２）

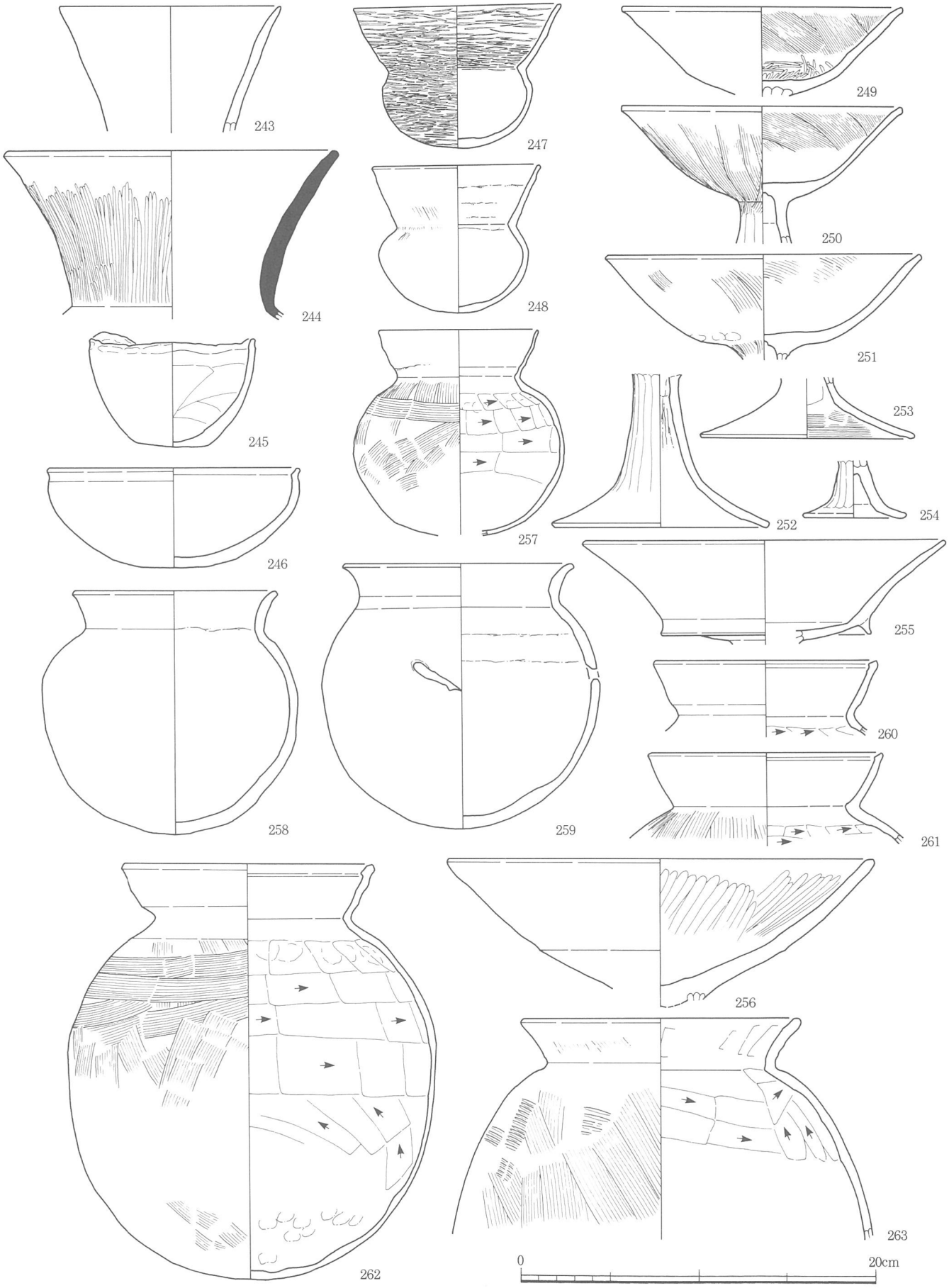


Fig. 53　ＮＲ2109出土遺物実測図（３）

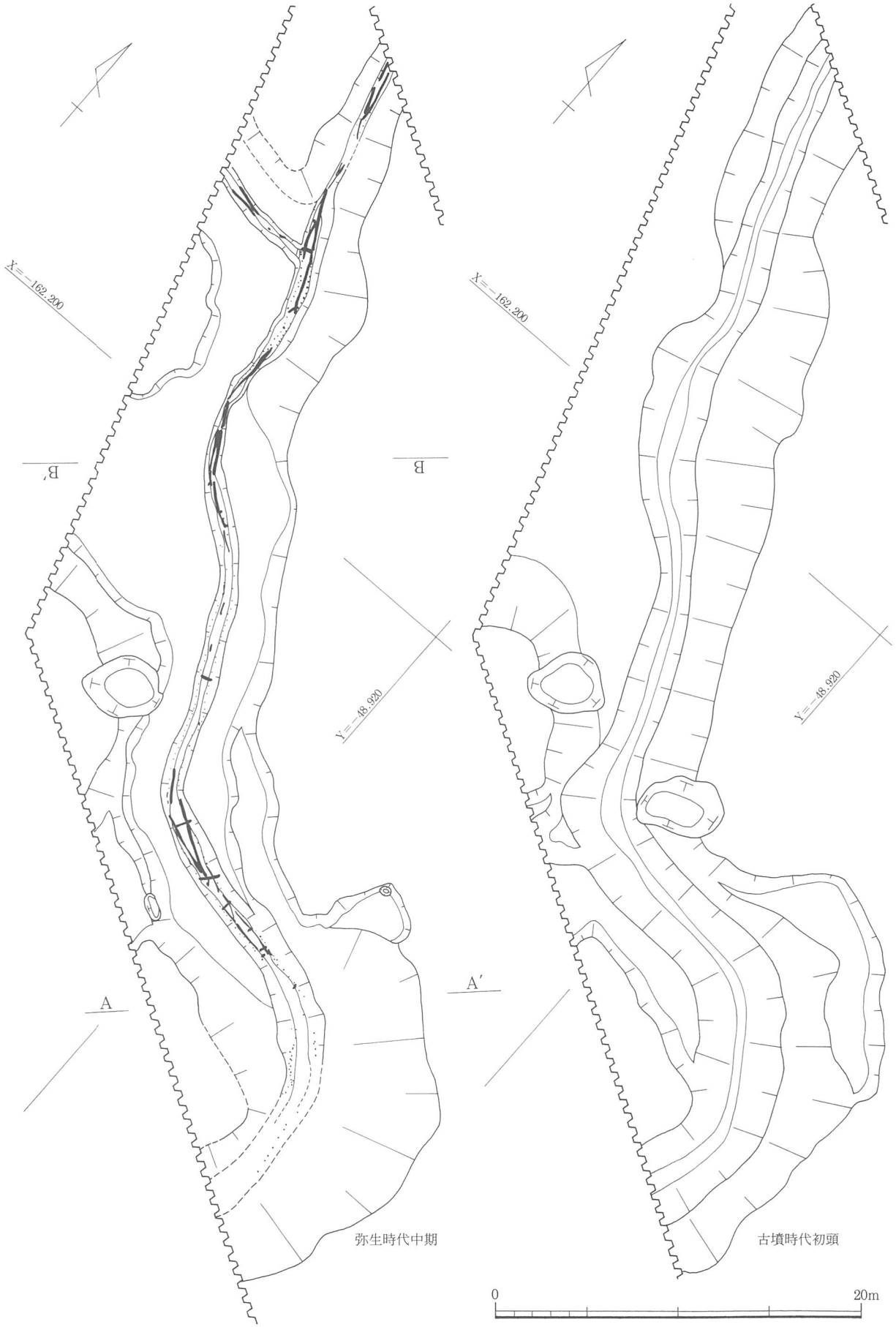


Fig. 54　ＳＤ1305平面図

けている。口縁部外面は２条の凸線で３区画され，それぞれに波状紋が巡る。239は球形の体部に広がる口縁を付加した壷で，口縁端部はやや肥厚し，凹んだ端面をもつ。肩部には平行タタキ痕を残す。

240は筒形器台の脚部で，ふんばった形状の底部の上に２条の凸線を巡らせ，その上部に方形透孔を穿つ。透孔と同位置に波状紋が施されている。241・242は鉢形器台である。241の口縁端部は「く」の字に外反し，中央が凹む端面を形成する。体部は２条一対の凸線によって区画され，内部を１～２条の波状紋で充塡する。242の口縁部は緩やかに外反し，端部を肥厚させて端面を設ける。体部は２条一対の凸線で区画され，内部に２条の波状紋が巡る。

土師器には壷(243・244)，鉢(245・246)，小形丸底土器(247・248)，高杯(249～256)，甕(257～263)などの器種がある。

243・244は直口壷である。244は口縁がやや外反気味に広がる。

245は粗製の小形鉢Ｘである。246は杯状の鉢Ｘで，口縁端部を僅かに外反させる。

247は口縁部が発達した小形丸底土器で，体部外面，口縁部内外面に密なミガキＢが施される。248は口縁部がやや直立気味に広がる小形丸底土器である。

249～251は布留系高杯である。いずれもハケを主体とした平滑技法を用いる。252・253は同じく布留系高杯の脚部と考えられ，いずれも中空である。254はミニチュアの高杯脚部。255は有稜高杯であるが，体部と口縁部の境界に垂下粘土帯を付加し稜線を強調する。256は大形の有稜高杯で，稜線は甘い。

257は小形の甕Ｘで，内湾する口縁部と球形の体部を備える。258・259は「く」の字に外反する口縁部と，球形の体部をもつ甕Ｘで，259は体部中央に細長い穿孔をもつ。260～262は布留式甕である。いずれも口縁部は内湾し，内側に肥厚して内傾する口縁端面を有する。完形の262では体部はやや長胴の傾向があり，内面ケズリは頸部のやや下方から行われ，体部外面を斜・縦方向ハケのち肩部を巡る横方向ハケを施す。263は弥生形甕Ｂで，タタキによる成形痕を縦方向ハケで消し，内面ケズリを施す。

ＳＤ1305

１．遺構(Fig.54～57，PL.６・７)

Ａ－３区を縦断する大溝で，本来はＡ－１区で検出されたＮＲ1104の右岸から分岐する小流路と考えられる。ＮＲ1104から分流する水口部分は調査区内では検出されず，その南側に位置していると推定される。大溝はⅥ層を基盤として形成されており，南側から蛇行しながら北側の調査区外へ流水させていたと思われ，幅７～11m以上，長さ69mの規模を有する。深さは時代によって異なるが，弥生時代中期

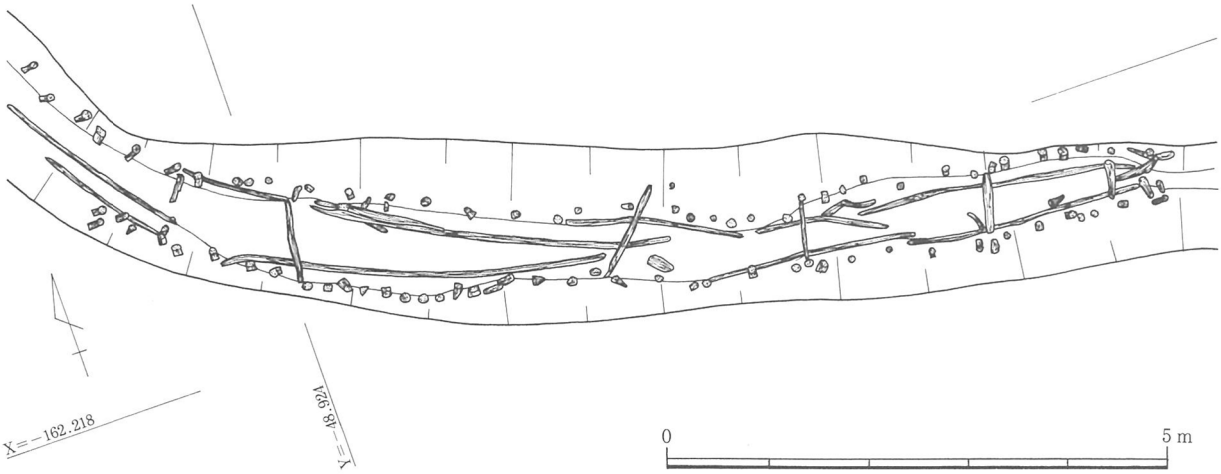
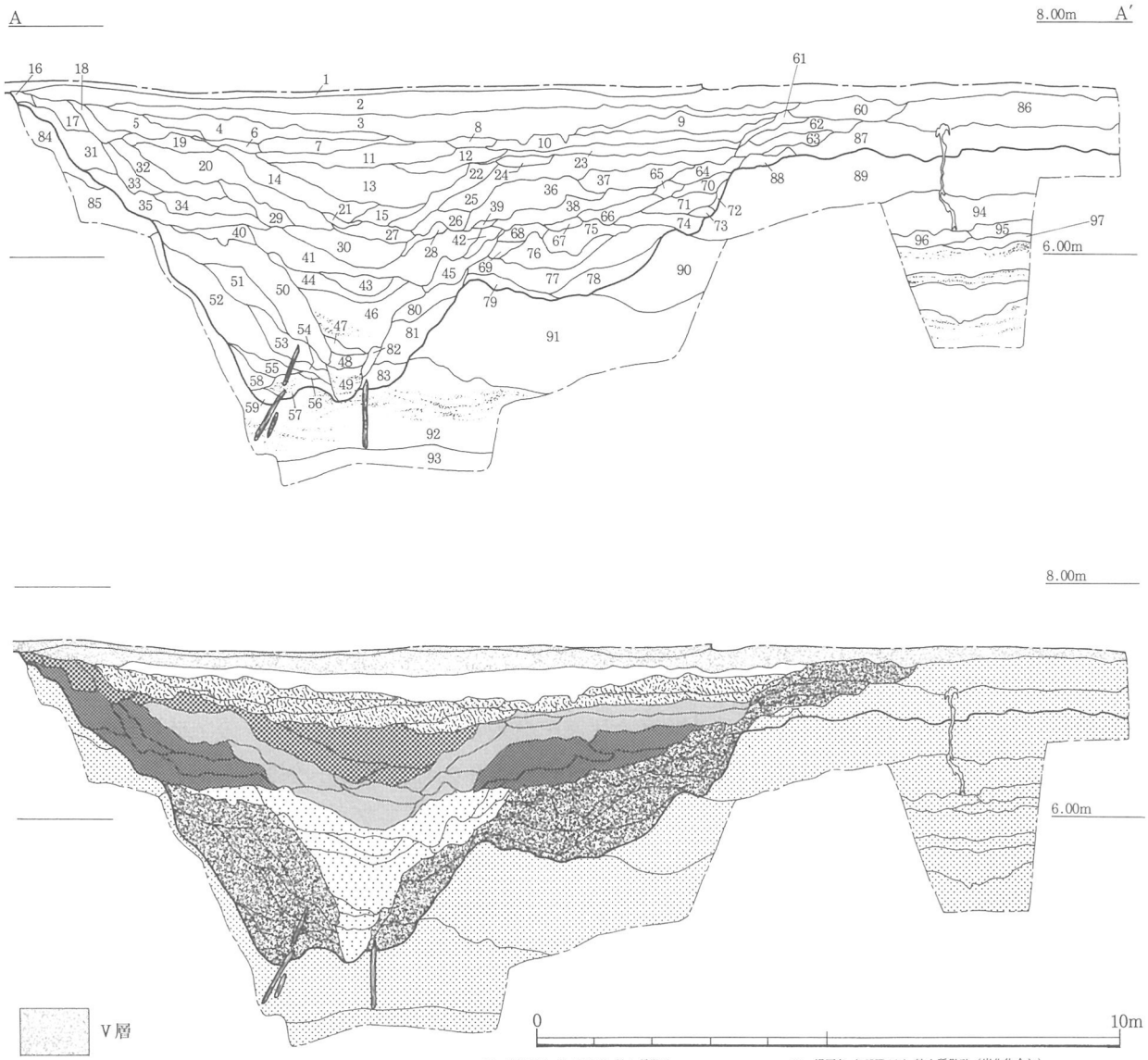
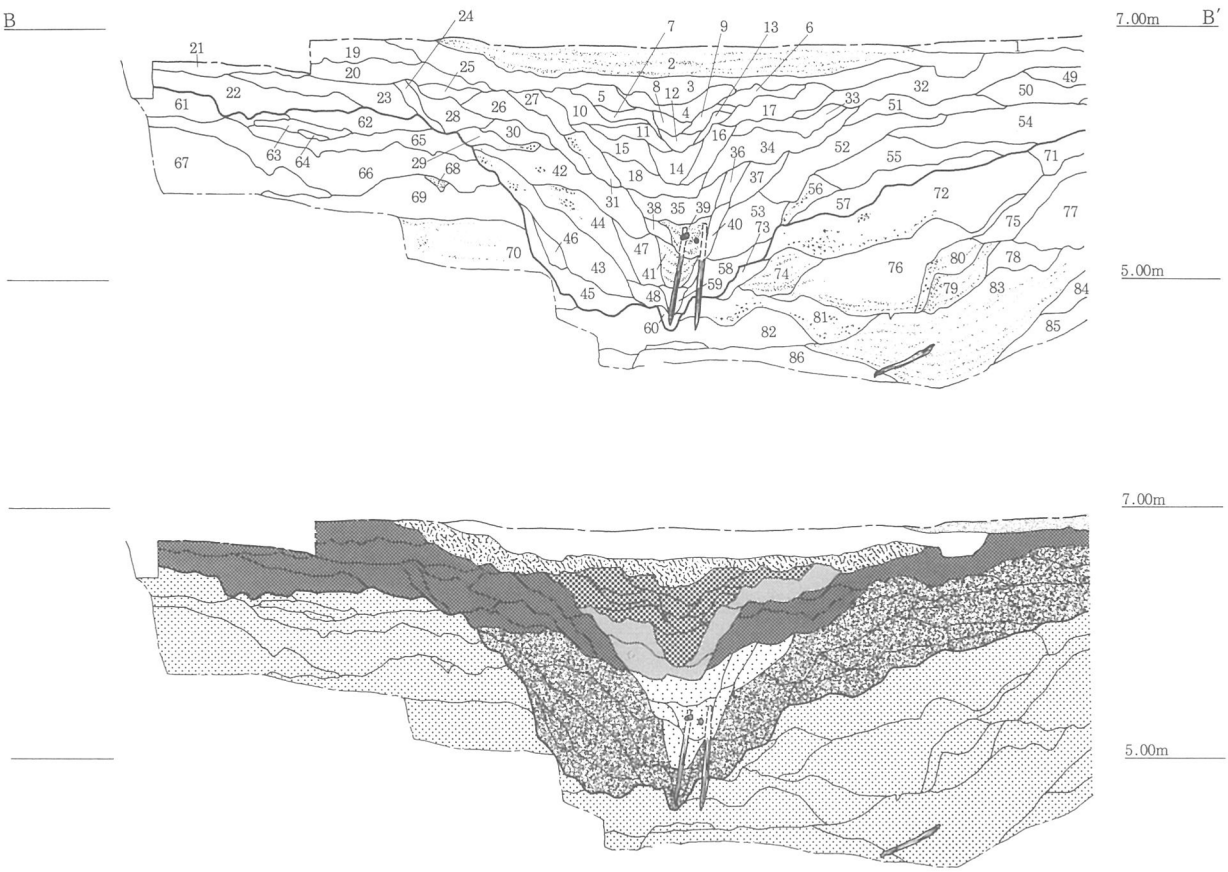


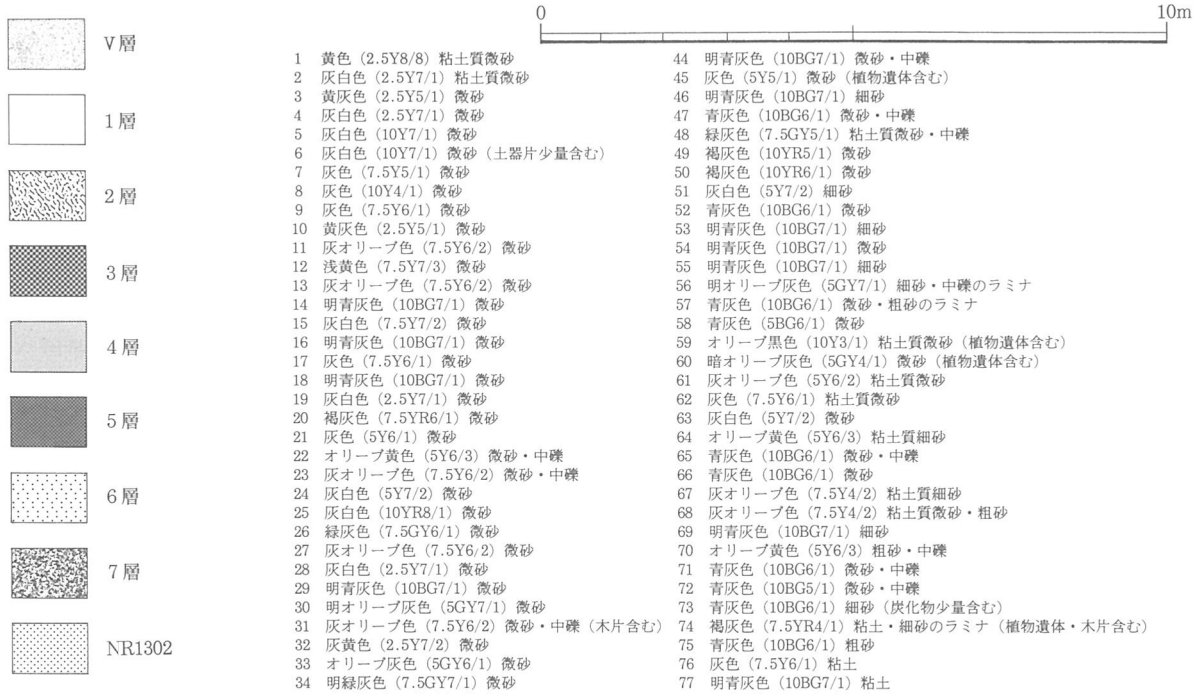
Fig.55　ＳＤ1305木杭詳細図



1　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂
2　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質微砂（土器片含む）
3　黒褐色（10YR3/2）粘土質微砂（土器片少量含む）
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）微砂
5　黄灰色（2.5Y5/1）粘土質微砂
6　黄灰色（2.5Y5/2）粘土質微砂
7　暗灰黄色（2.5Y4/2）微砂
8　にぶい黄褐色（10YR4/3）微砂
9　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質微砂
10　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質微砂
11　褐灰色（10YR5/1）粘土質微砂
12　黄灰色（2.5Y6/1）微砂
13　灰黄色（2.5Y6/2）微砂
14　灰褐色（10YR4/2）粘土質微砂（炭化物含む）
15　オリーブ黄色（5Y6/3）粘土質微砂
16　灰白色（10YR7/1）粘土質微砂
17　暗灰黄色（2.5Y5/2）微砂
18　灰黄褐色（10YR5/2）粘土質微砂
19　黄褐色（10YR5/6）粘土質微砂
20　灰黄褐色（10YR5/2）粘土質微砂（炭化物少量含む）
21　灰色（5Y5/1）粘土質微砂
22　暗灰黄色（2.5Y5/2）微砂
23　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
24　灰オリーブ色（5Y6/2）微砂
25　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土質微砂（土器片含む）
26　暗灰色（2.5Y5/2）粘土質微砂
27　オリーブ灰色（5GY6/1）粘土質微砂
28　灰色（10YR5/1）粘土質微砂
29　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂（土器片含む）
30　灰黄色（2.5Y6/3）粘土質微砂
31　灰黄褐色（10YR5/2）粘土質微砂
32　褐灰色（10YR5/1）粘土質微砂
33　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質微砂
34　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
35　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質微砂
36　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂（土器片含む）
37　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂（土器片含む）
38　黒褐色（10YR3/1）粘土質細砂・中礫（炭化物含む）
39　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂
40　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂（土器片含む）
41　灰色（10Y5/1）粘土質微砂（土器片含む）
42　灰色（5Y5/1）粘土質微砂
43　灰色（10Y5/1）中砂
44　緑灰色（10GY6/1）粘土質微砂
45　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂
46　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土質微砂
47　灰色（10Y6/1）粘土質微砂
48　オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土質微砂
49　オリーブ灰色（2.5GY5/2）粘土質微砂
50　灰黄色（12Y5/1）粘土質微砂（土器片含む）
51　灰オリーブ色（5Y6/2）微砂
52　灰色（5Y6/1）微砂
53　青灰色（10G5/1）粘土質微砂
54　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂（木片含む）
55　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂
56　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質微砂（木片含む）
57　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂（木片含む）
58　緑灰色（7.5GY6/1）粘土質微砂
59　緑灰色（5G6/1）粘土質微砂（木片含む）
60　灰白色（5Y7/1）粘土質微砂
61　黄灰色（2.5Y5/1）粘土質微砂
62　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘土質微砂
63　灰黄色（2.5Y6/2）粘土質微砂
64　灰黄褐色（10Y5/2）粘土質微砂（土器片含む）
65　黄灰色（2.5Y5/1）微砂
66　灰黄色（2.5Y6/2）微砂
67　褐灰色（10YR4/1）粘土質微砂（炭化物含む）
68　灰白色（5Y7/1）粘土質微砂
69　灰色（10Y5/1）粘土質微砂
70　黄灰色（2.5Y6/1）粘土質微砂（土器片含む）
71　黄灰色（2.5Y6/2）微砂
72　にぶい黄色（2.5Y6/3）粘土質微砂
73　灰白色（7.5Y7/2）粘土
74　灰オリーブ色（5Y5/2）粘土質微砂（土器片含む）
75　灰色（7.5Y5/1）粘土質微砂
76　暗灰黄色（2.5Y5/2）粗砂
77　緑灰色（7.5GY5/1）細砂
78　緑灰色（5G5/1）細砂
79　灰オリーブ色（7.5Y5/2）中礫
80　緑灰色（10G5/1）粘土質微砂
81　緑灰色（7.5GY5/1）粘土質微砂
82　緑灰色（10GY6/1）粘土質微砂
83　オリーブ灰色（5GY5/1）粘土質微砂
84　灰黄色（2.5Y6/2）微砂（炭化物含む）
85　オリーブ灰色（2.5GY5/1）粘土質微砂
86　灰黄褐色（10YR6/2）粘土質微砂
87　にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土質微砂
88　灰白色（5Y7/2）粘土質微砂
89　灰オリーブ色（5Y6/2）粘土質微砂
90　緑灰色（10GY5/1）粘土質微砂
91　緑灰色（10GY6/1）粘土質微砂・細砂のラミナ（植物遺体含む）
92　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）細砂・植物遺体のラミナ
93　灰色（10Y5/1）粗砂
94　黄褐色（2.5Y5/3）粘土質微砂（土器片含む）
95　黒褐色（10YR3/2）粘土質微砂（土器片少量含む）
96　にぶい黄褐色（10YR4/3）微砂
97　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土質微砂

Fig. 56　ＳＤ1305断面図（１）





1　黄色（2.5Y8/8）粘土質微砂
2　灰白色（2.5Y7/1）粘土質微砂
3　黄灰色（2.5Y5/1）微砂
4　灰白色（2.5Y7/1）微砂
5　灰白色（10Y7/1）微砂
6　灰白色（10Y7/1）微砂（土器片少量含む）
7　灰色（7.5Y5/1）微砂
8　灰色（10Y4/1）微砂
9　灰色（7.5Y6/1）微砂
10　黄灰色（2.5Y5/1）微砂
11　灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂
12　浅黄色（7.5Y7/3）微砂
13　灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂
14　明青灰色（10BG7/1）微砂
15　灰白色（7.5Y7/2）微砂
16　明青灰色（10BG7/1）微砂
17　灰色（7.5Y6/1）微砂
18　明青灰色（10BG7/1）微砂
19　灰白色（2.5Y7/1）微砂
20　褐灰色（7.5YR6/1）微砂
21　灰色（5Y6/1）微砂
22　オリーブ黄色（5Y6/3）微砂・中礫
23　灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂・中礫
24　灰白色（5Y7/2）微砂
25　灰白色（10YR8/1）微砂
26　緑灰色（7.5GY6/1）微砂
27　灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂
28　灰白色（2.5Y7/1）微砂
29　明青灰色（10BG7/1）微砂
30　明オリーブ灰色（5GY7/1）微砂
31　灰オリーブ色（7.5Y6/2）微砂・中礫（木片含む）
32　灰黄色（2.5Y7/2）微砂
33　オリーブ灰色（5GY6/1）微砂
34　明緑灰色（7.5GY7/1）微砂
35　青灰色（10BG6/1）微砂
36　青灰色（10BG6/1）微砂
37　浅黄色（7.5Y7/3）微砂
38　青灰色（10BG6/1）粘土質微砂
39　褐灰色（7.5YR6/1）微砂
40　明青灰色（10BG7/1）微砂（植物遺体含む）
41　青灰色（10BG6/1）細砂（植物遺体少量含む）
42　青灰色（10BG6/1）微砂・中礫
43　青灰色（10BG6/1）微砂・中礫
44　明青灰色（10BG7/1）微砂・中礫
45　灰色（5Y5/1）微砂（植物遺体含む）
46　明青灰色（10BG7/1）細砂
47　青灰色（10BG6/1）微砂・中礫
48　緑灰色（7.5GY5/1）粘土質微砂・中礫
49　褐灰色（10YR5/1）微砂
50　褐灰色（10YR6/1）微砂
51　灰白色（5Y7/2）細砂
52　青灰色（10BG6/1）微砂
53　明青灰色（10BG7/1）細砂
54　明青灰色（10BG7/1）微砂
55　明青灰色（10BG7/1）細砂
56　明オリーブ灰色（5GY7/1）細砂・中礫のラミナ
57　青灰色（10BG6/1）微砂・粗砂のラミナ
58　青灰色（5BG6/1）微砂
59　オリーブ黒色（10Y3/1）粘土質微砂（植物遺体含む）
60　暗オリーブ灰色（5GY4/1）微砂（植物遺体含む）
61　灰オリーブ色（5Y6/2）粘土質微砂
62　灰色（7.5Y6/1）粘土質微砂
63　灰白色（5Y7/2）微砂
64　オリーブ黄色（5Y6/3）粘土質細砂
65　青灰色（10BG6/1）微砂・中礫
66　青灰色（10BG6/1）微砂
67　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土質細砂
68　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土質微砂・粗砂
69　明青灰色（10BG7/1）細砂
70　オリーブ黄色（5Y6/3）粗砂・中礫
71　青灰色（10BG6/1）微砂・中礫
72　青灰色（10BG5/1）微砂・中礫
73　青灰色（10BG6/1）細砂（炭化物少量含む）
74　褐灰色（7.5YR4/1）粘土・細砂のラミナ（植物遺体・木片含む）
75　青灰色（10BG6/1）粗砂
76　灰色（7.5Y6/1）粘土
77　明青灰色（10BG7/1）粘土
78　明青灰色（10BG7/1）中砂
79　明青灰色（5BG7/1）中砂（植物遺体含む）
80　青灰色（5BG6/1）細砂・中礫（植物遺体含む）
81　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粗砂・中礫
82　緑灰色（10GY5/1）細砂
83　緑灰色（7.5GY5/1）細砂（植物遺体ラミナ状に含む）
84　オリーブ灰色（5GY6/1）粘土
85　緑灰色（10GY5/1）粗砂・中礫
86　緑灰色（7.5GY5/1）粗砂

Fig.57　ＳＤ1305断面図（２）

の段階では約2.8mである。溝底付近の中央は幅0.5～1.7m，深さ0.7mの小溝が掘削され，その両岸に多数の木杭が打設されていた。杭は長さ70㎝前後の丸材，みかん割りの角材で，小溝の両肩に連続的に認められた。また小溝の底に沿って長い棒状の材を配置し，短い材を横桟として木杭間に固定した箇所も部分的に認められた(Fig.57)。調査区の北側では北に向かう本流から，西に流れる小溝が分岐している。これらは流水を確保するための護岸施設と考えられ，出土遺物から弥生時代中期の所産と見なすことができる。中期に続く土器は，後期弥生土器，古式土師器で占められており，時代的な断絶を挟みながら古墳時代初頭～前期に至っても，何等かの機能を有していた遺構と考えられる。弥生時代中期に形成された小溝は，古墳時代初頭までに堆積した土砂によって完全に埋没するが，その間の堆積土の厚さは約1.2mであった。堆積土によって深さを減じた他は，溝の位置や検出面での形状など，特に顕著な変化は認められない。検出面から古墳時代初頭の溝底までの深さは約1.6mで，両岸から溝の中心へ緩くレベルを下げる断面形状である。堆積土は７層に大別され，６・７層が弥生時代中期，５層が弥生時代後期，２～４層が古墳時代初頭，１層が古墳時代前期の堆積層位と考えられる。なおＳＤ1305下層のかなり広い範囲では，不整合の関係にある砂層が認められ，縄文時代晩期の流路ＮＲ1302と考えられる。

堆積土に包含された土器について，出土層位ごとに述べる。２・３層では古式土師器で構成された土器溜(ＳＷ1159・1360～1366)が検出されているが，遺構として別途記述する。

2-a．６・７層遺物(Fig.58～62，PL.75・76)

最下層に位置する堆積層で，弥生時代中期の土器だけが出土した。器種には壷(264～270・273～282)，鉢(272)，蛸壷(285・286)，甕(271・287～289)，高杯(290～297)，水差(283・284)などがある。

264～267・270は広口壷である。口縁端部を強く垂下させる264は，口縁端面と口縁部外面を簾状紋で飾った生駒西麓産の胎土を有する搬入土器である。264～267は口縁端部を肥厚させて垂下させる。いずれも口縁端面と口縁部外面に簾状紋を飾り，口縁端面には円形浮紋を一定間隔で貼付する。266は胎土の発色が他と異なり，搬入土器の可能性もある。267・270は小形の広口壷で，体部下半に最大径をもつ。268・269は有段口縁壷である。268は有段部直上に２条の凹線紋が走り，口縁部を簾状紋で飾る。269は口縁部直下と有段部直上にそれぞれ２条ずつ凹線紋を設け，頸部に刻目を施している。273～276は広口短頸壷で，いずれも加飾されないシンプルな壷である。体部は平底をもつ倒卵形を呈するが，口縁形態は短い頸部からやや急に外反し，端部を上方に屈曲させる273・274，頸部から緩やかに外反し，肥厚させた端部を僅かに下方へ垂下させる275・276がある。277～282は台付無頸壷である。体部下半が張り出し，短く大きく開く脚部をもつ277～279と，扁球状の体部に上広がりの低脚がつく280がある。281・282は前者の脚部と考えられる。277・278は口縁端部を肥厚させ，外面に段を設けている。280は口縁部直下に１条，体部上半に３条，脚部に２条の凹線紋を配する。283・284は水差で，283は生駒西麓産の胎土をもつ搬入土器で，下膨れの体部をもつ。遺存状態は極めて不良だが肩部に簾状紋が認められる。284は体部下半に最大径があり，肩部に簾状紋，体部上半に流水紋を飾るが，その装飾技術はかなり稚拙な観がある。把手の断面は長方形を呈する。

272は小形の甕形の鉢で，頸部から口縁端部を緩やかに外反させている。蛸壷285・286はいずれも全体をナデ仕上げとし，丸い底部をもつ。

甕には小形の271，大形の287～289がある。271は倒卵形の体部に平底をもち，口縁部は頸部から外反して端部を明瞭に上方へ拡張する。287～289は，いずれも体部上半が大きく張り出す倒卵形と思われ，頸部が強く屈曲する。口縁端部は上方に拡張されて端面をもつ。289は端面に３条の凹線紋を配する。

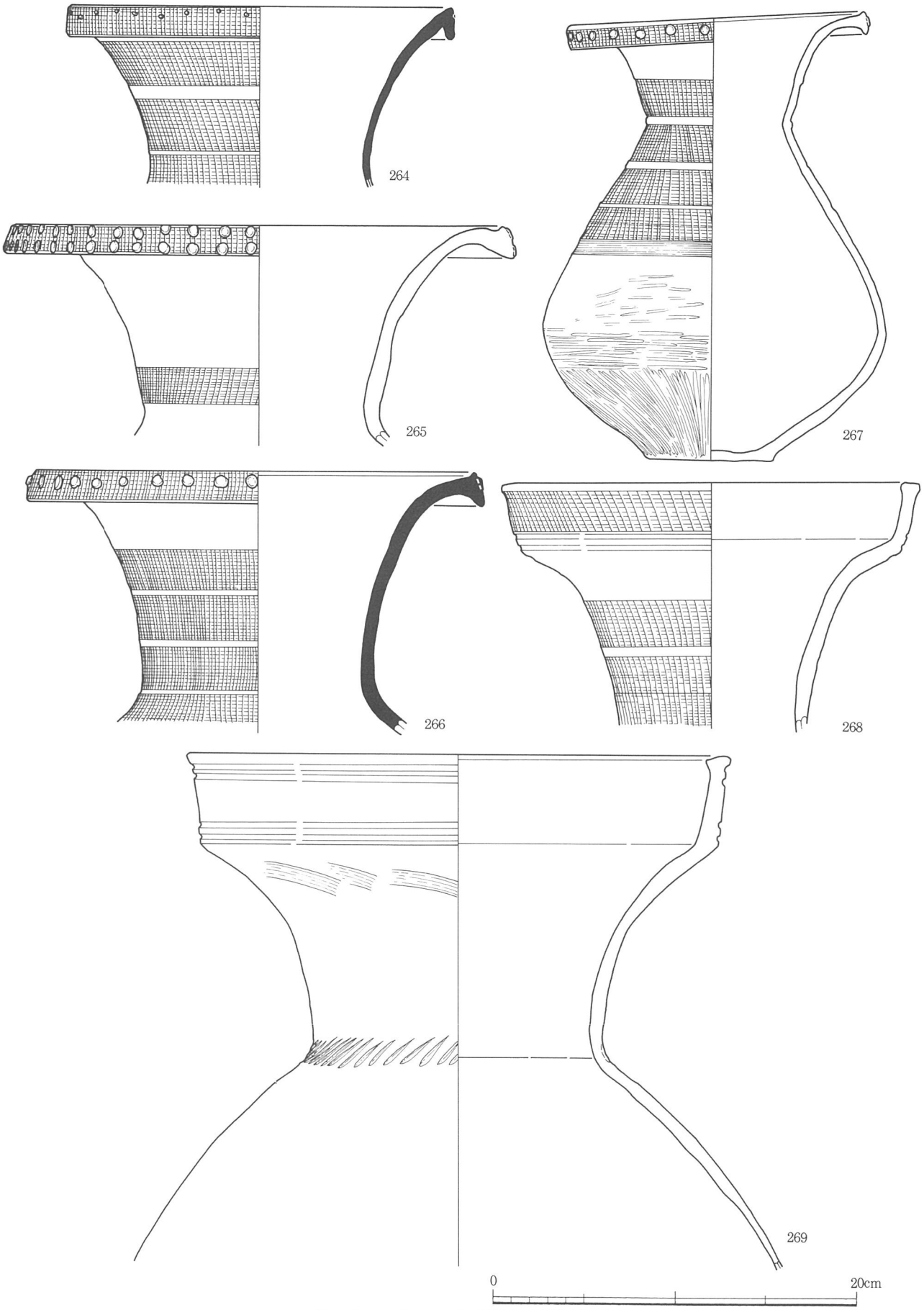


Fig. 58　ＳＤ1305出土遺物実測図（１）

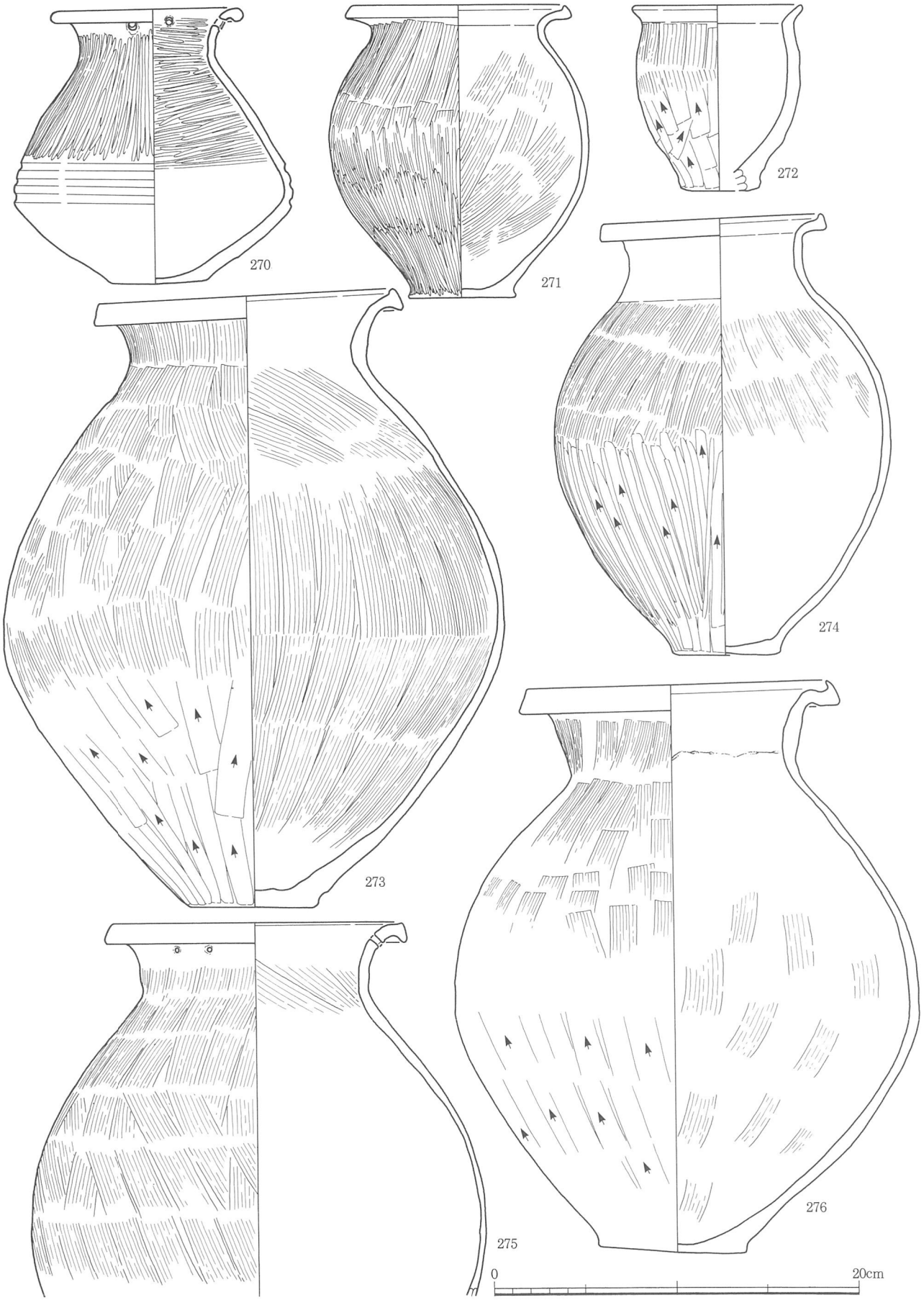


Fig. 59　ＳＤ1305出土遺物実測図（２）

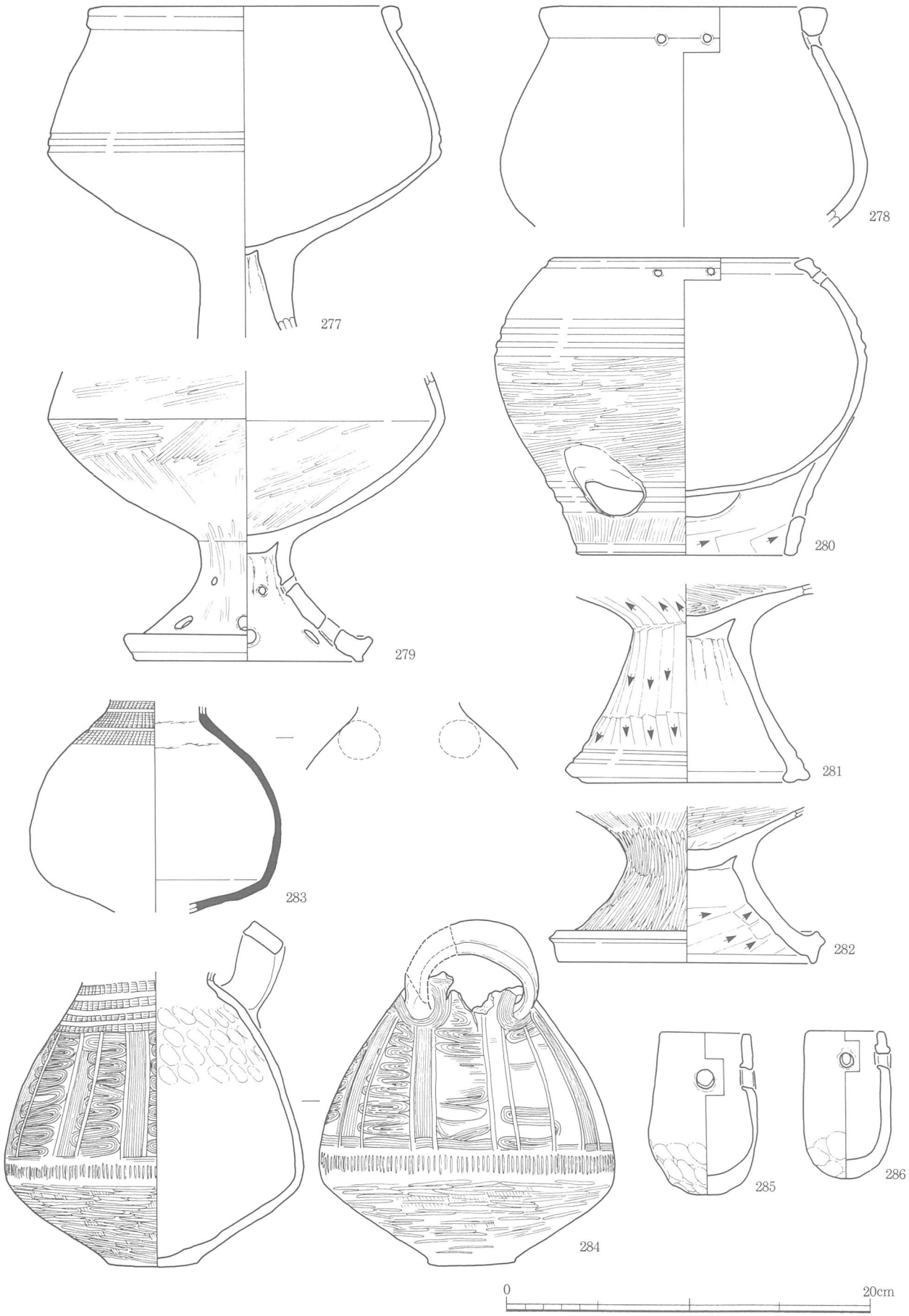


Fig. 60　ＳＤ1305出土遺物実測図（３）

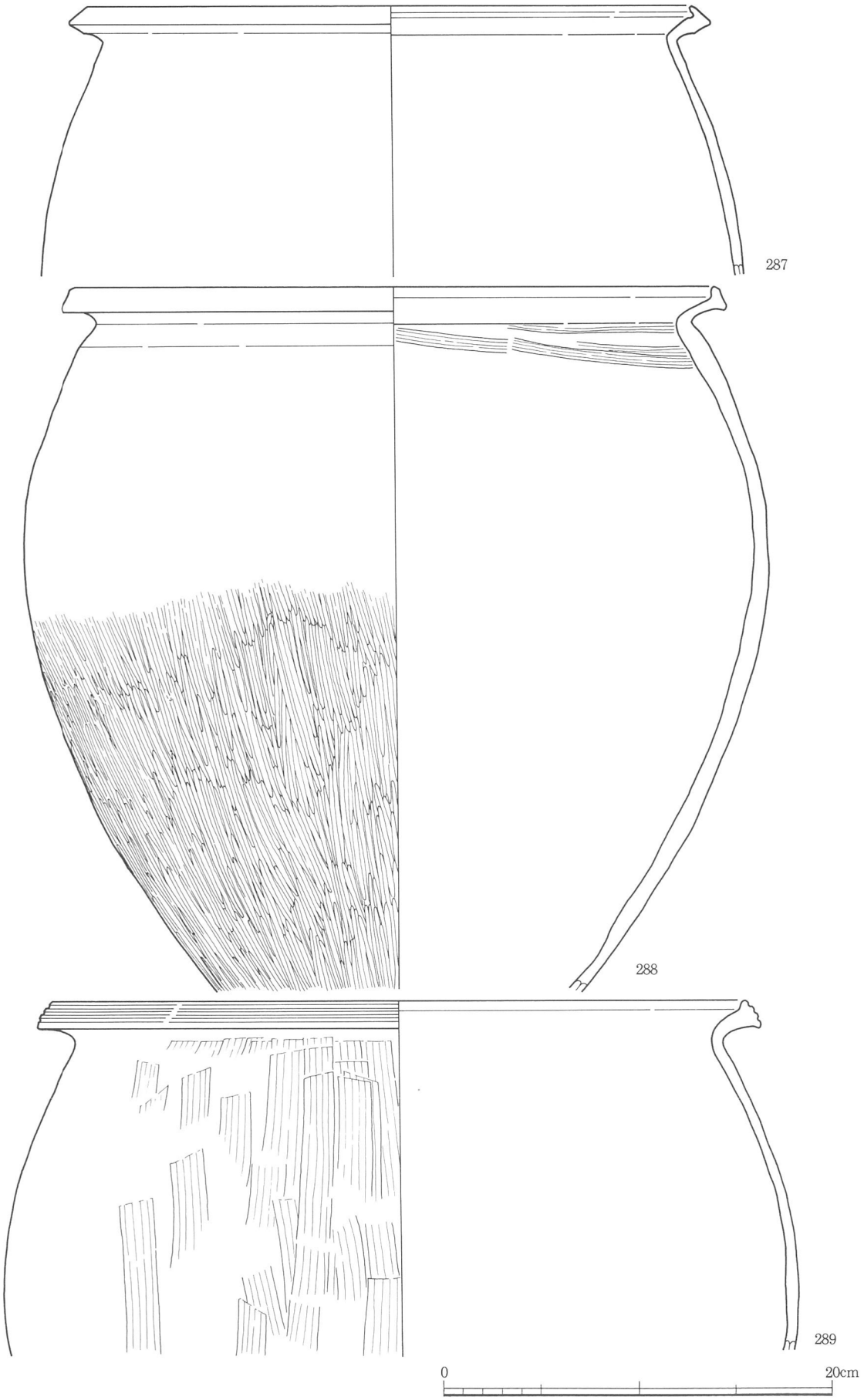


Fig. 61　ＳＤ1305出土遺物実測図（４）

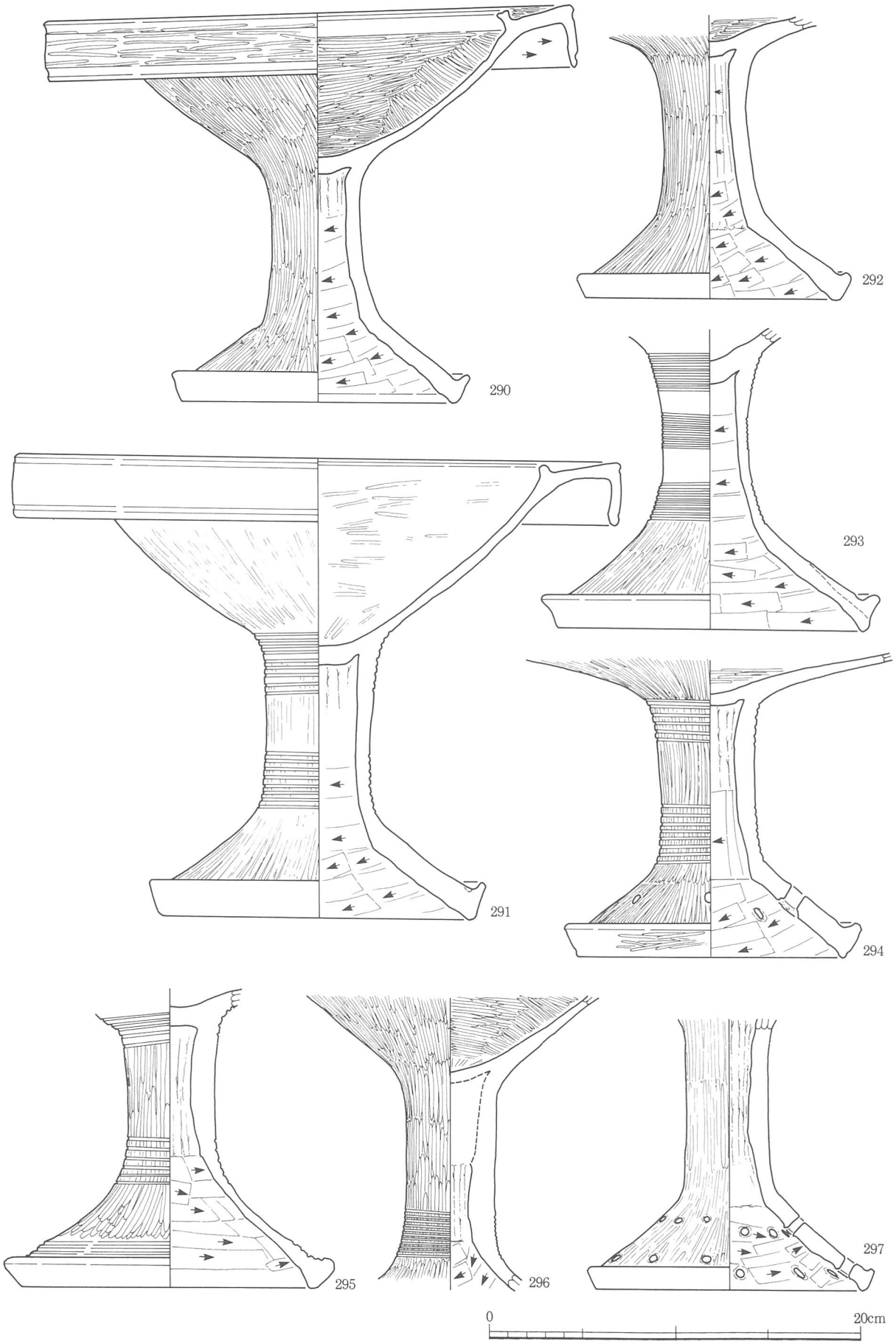


Fig. 62　ＳＤ1305出土遺物実測図（５）

290・291は水平縁をもつ高杯，292～297は高杯脚部である。290は明瞭に内面突帯を設け，口縁端部を幅広く垂下させている。全体的に加飾はみられない。292も同様に無紋の脚部である。291は290とほぼ同形態であるが，脚柱部の上下にそれぞれ直線紋を配し，脚裾の端面拡張部の内側に刻目紋を飾る。脚部の形状は，いずれも筒状の脚柱部と大きく広がる脚裾を備え，脚裾部に端面を有する。内面はケズリによって調整されている。脚部の装飾として，脚柱部に直線紋１条を配した296，２条を配した291・294・295，３条を配した293がある。また透孔をもたない290～293・295，脚裾部に円孔を１列設けた294，小円孔を２列に設けた297がある。295では裾部に４条の凹線を巡らせている。

2-b．５層遺物(Fig.64・65，PL.77・78)

５層は，弥生時代中期の形成になる６・７層が完全に堆積した後，これらを覆うように形成された層位である。５層からは弥生時代後期後半の土器が比較的集中して出土した。出土地点はC11ＥＷ・ＨＸ・ＧＸの３区画だけであり，分布範囲はＳＤ1305南東部の右岸にほぼ限定されている(Fig.63)。壷(298～302・308～311)，甕(303)，高杯(304～307)などの器種が認められた。

298は玉葱状の体部に，僅かに外反気味の長い口頸部を付加した長頸壷Ａである。299は平底で倒卵形の体部に，大きく広がる口縁部を付加した広口長頸壷で，頸部のくびれは不明瞭である。300～302は短頸壷である。口縁部は頸部から短く延び，また口径は頸部径よりも大きく広がらない。いずれも平底をもつが，体部の形態は倒卵形の300，やや扁球状の301，球形に近い302がある。301の底部付近には基本成形段階のタタキ成形痕が観察される。308～310は広口壷である。いずれも平底をもち，体部は倒卵形か球形を呈する。口縁部の形態については，単純に外反させる308・310，口縁端部を受口状に上方に拡張する309がある。308・309の肩部には，それぞれ３本線のヘラ記号が記される。309の体部下半には２カ所の穿孔を有する。311は複合口縁壷である。口縁部内面の屈曲自体は強くないが，外面は稜線を肉厚に作って視覚的に強調するようである。全体に作りが粗く，底部の平底も変形して不安定である。

甕303は平底に倒卵形の体部を有し，口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。口縁端部にはかなり明瞭な端面を設けている。外面タタキ，内面ハケ調整。

高杯には椀形高杯304，有稜高杯305・307，脚部306がある。304は椀形の杯部に中空で裾広がりの脚部をもつ。305・307は深い体部に短く外反する口縁をもつ。305は遺存状態が良好で，口縁部内外面と脚部外面にミガキＡが観察される。306も含めて脚部は中空で大きく裾広がりの形状である。脚柱部と裾部の区別が不明瞭な305，区別が比較的明瞭な306・307がある。

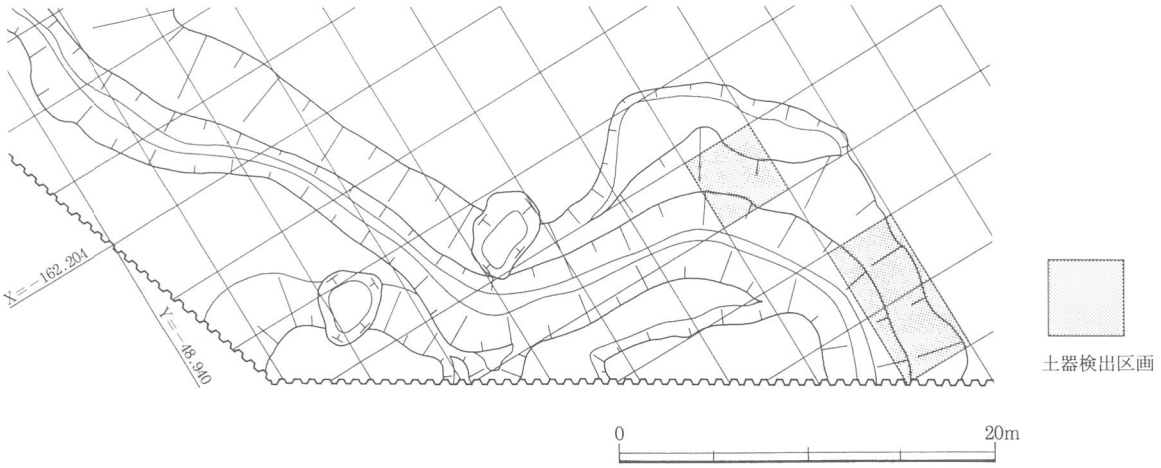


Fig.63　ＳＤ1305・５層土器平面分布図

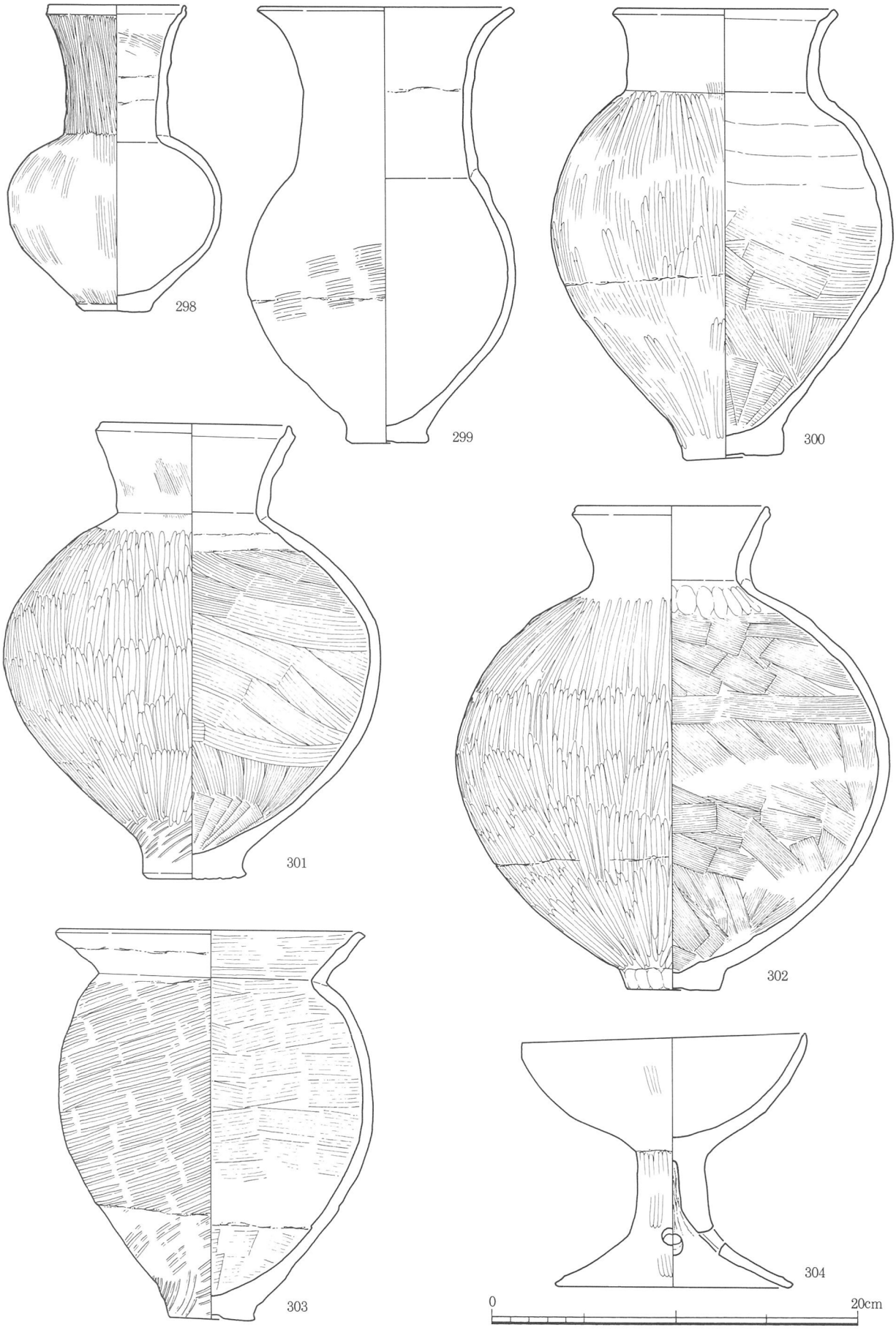


Fig. 64　ＳＤ1305出土遺物実測図（６）

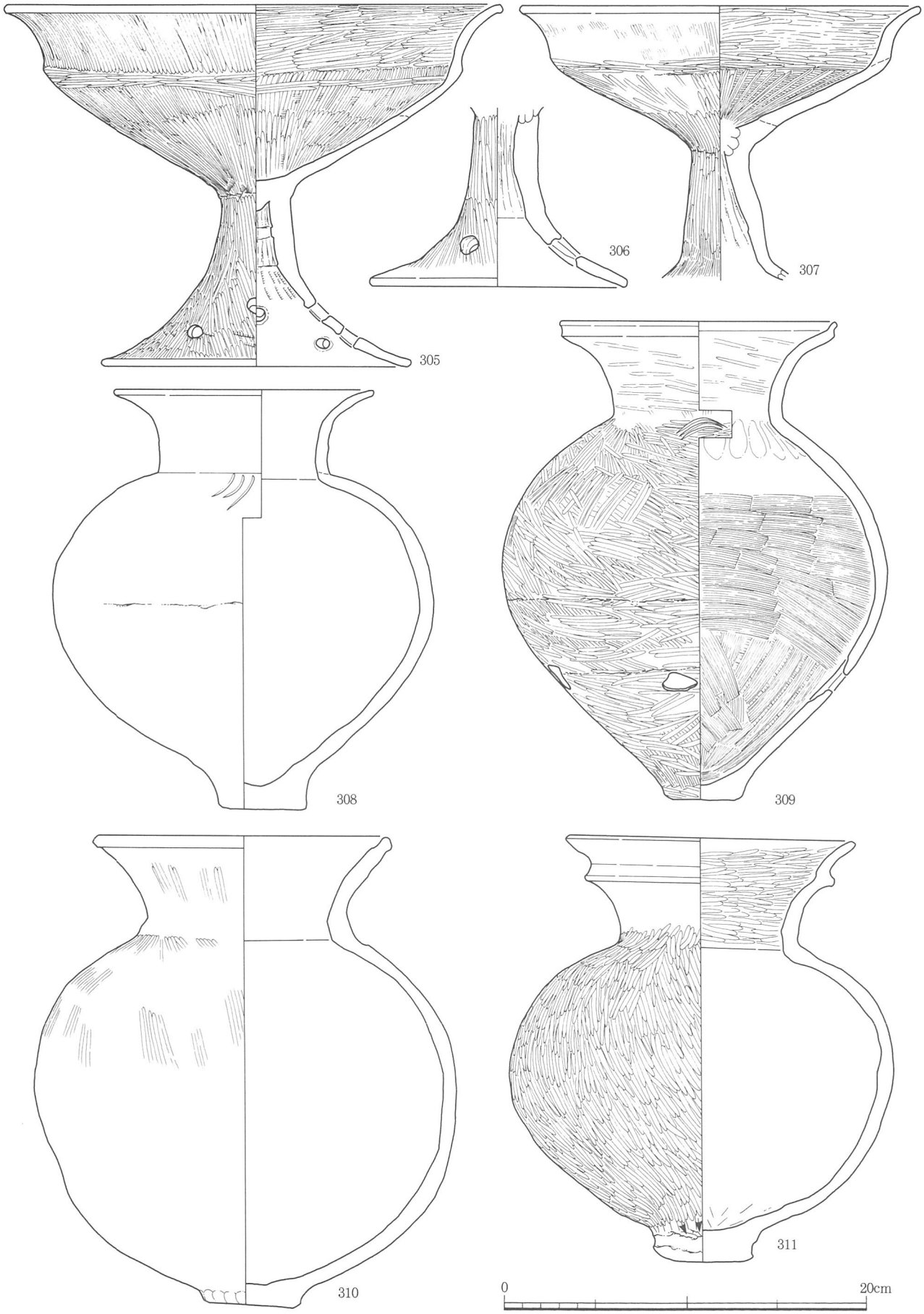


Fig. 65　ＳＤ1305出土遺物実測図（７）

2-c．４層遺物(Fig.67～83，PL.79～92)

４層は最大約40㎝の厚さで堆積した層位で，出土土器は概ね保存状態が良好で，また量的にも豊富である。土器は特に溝中心の最深部から集中的に出土し，溝の肩口付近からの出土量は減少する。また壷・甕・高杯・鉢の主要４器種の出土地点の広がりは，地区割の最小単位である４ｍ四方，16㎡ごとの平面分布(Fig.66)から，いずれの器種も溝内の限られた範囲で集中的に出土していることがわかる。分布の中心は概ねＣ11ＣＳ・ＤＳ・ＥＳ・ＥＴの幅４ｍ，長さ10余ｍの範囲内にあって，この中心から外れると出土点数が激減するか，あるいは全く検出されなかった。４層出土土器群は，個々の型式学的所見，並びに全体の土器様相，さらに溝内への集中的な土器の投棄行為が想定される以上の如き出土状況から，短期間に埋没した一括性の高い土器群とみなすことができよう。

出土した土器の器種には，壷(312～339)，甕(340～390・477・478)，高杯(391～425)，鉢(426～455)，器台(456～467)，製塩土器(468～474)，脚台(475・476)，注口土器(481)，その他(479・480)がある。

壷は合計28点が出土した。壷には広口壷・広口直口壷・細頸直口壷・台付壷・複合口縁壷・小形壷などの種類がある。312～316・321・322・334は広口壷で，Ａが主体を占めているがＢ，Ｃの存在も少量ながら認められる。広口壷は合計８点を数える。312・313・315・316・321・322は広口壷Ａで，ほぼ球形で平底をもつ体部に，頸部から外反して広がる口縁部を有する。６点。広口壷Ｂの314は，口縁端面に一定間隔で竹管紋を巡らせ加飾を行う。１点。広口壷の調整は，外面では縦方向を主とするミガキＡ，もしくはナデ，内面ではハケ・ナデを主とする平滑技法である。334は広口壷Ｃである。１点。口頸部の形態は広口壷Ｂに類似するが，拡張して垂下する端面を有する。端面を装飾帯として，外面に波状紋と３個１単位の円形浮紋，口縁内面に波状紋と竹管紋を押捺する。また肩部には波状紋を上から下へ連続的に巡らせている。広口直口壷317～320は，口縁が短く直線的，もしくは極めて緩やかに外上方へ延びる壷で，口縁の傾斜は広口壷よりも急角度である。４点。体部は球形に近い形状で大きく張り出すようである。比較的小形の320は，球形の体部に小さい平底をもつ。この個体は口縁打ち欠きの他，体部中央と底部付近にそれぞれ外面からの穿孔を有する。細頸直口壷は323～328の６点が出土している。いずれも体部の中央もしくは下半に最大径をもち，算盤玉状の扁球形を呈する。326は明瞭な平底をもつが，底部が退化して径の小さい窪み底を有する個体が主体を占める。324は口縁端部に細かい刻目を施す。329は台付壷で，体部以上の形状は細頸直口壷と類似するが，体部が球形に近い点で異なる。330～333は複合口縁壷である。４点。緩やかに外反する頸部をもつ330～332，頸部の上半が強く屈曲して明瞭な受部を作る333がある。330は無紋の複合口縁壷Ａであるが，331～333は加飾性に富んだＢである。331は口縁部外面に波状紋と直線紋，内面は口縁から受部にかけて３条の波状紋と１条の直線紋を配する。332は口縁部下端に竹管紋を押捺した円形浮紋を２個一対で配置し，頸部のくびれ部分に刻目を刻んだ突帯を巡らせる。333は最も加飾された個体であるが，装飾法の個々の要素は先に述べた壷と共通する箇所が多い。333の口縁部外面の装飾は331と，頸部くびれ部分の突帯は332と同様で，また333の体部上半は３条の波状紋と１条の直線紋で飾られるが，この意匠は331の口縁内面と共通する。相違点は333の口縁端面と体部上半に円形浮紋を配置する点である。口縁端部の円形浮紋は２個一対で，竹管紋を押捺している。体部上半の円形浮紋はすべて剝離し，焼成時の火廻り不良の部分から推測すると，やはり２個一対となっていたようである。口縁部の浮紋の剝離痕には，貼付箇所を割り付けた竹管紋が認められるが，体部の浮紋に関してはそのような措置が講じられていない。外面・口縁内面の他，体部内面までミガキＡが施されている。335～339は小形壷として一括する。５点。平底をもつ338，尖底気味

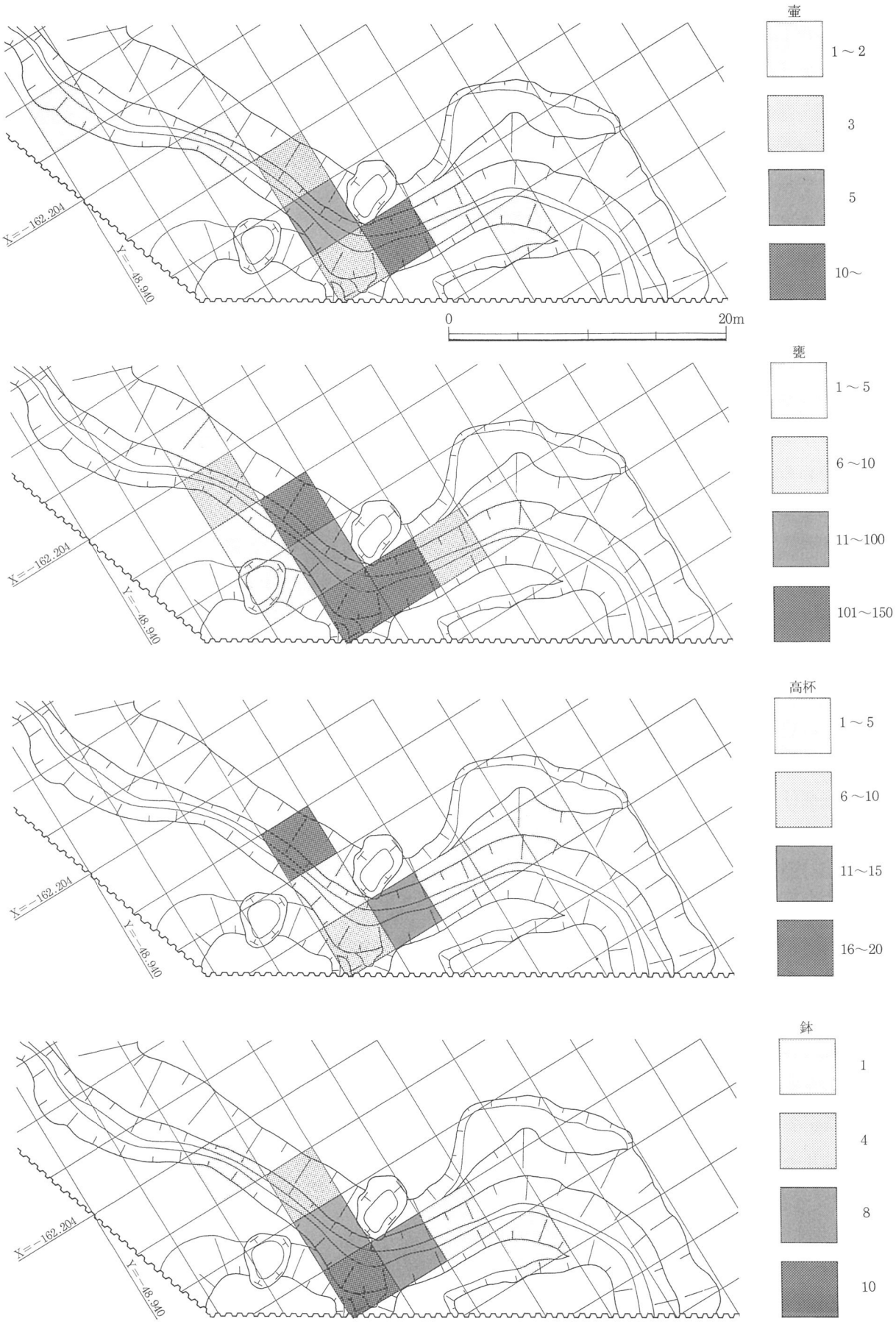


Fig.66　ＳＤ1305・４層土器平面分布図

の336・337，ほとんど丸底化した335・339など，底部には各形態がある。338は甕類似形態であるが，体部外面に密なミガキＡを施すことから，小形壷に含めている。いずれの壷も口縁部は短いようで，また加飾は行われていない。

弥生形甕Ａは口縁部で計測して491点を数える。右上がり，もしくは水平方向のタタキで成形された個体を主流とするが，一部に左上がりのタタキ成形痕もみられる。内面の調整には各種の平滑技法が用いられている。いずれも底部形態ＡあるいはＢの平底である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反し，口縁端部を丸くおさめるもの，やや上方に拡張するものが認められる。完形品，完存品，あるいはそれに近い遺存状態の個体の中で，在来系土器Ｉ類の弥生形甕Ａについては器高からＡａ～Ａｅまでの分類を行った。340～353は，超小形の甕Ａｅである。体部は倒卵形の個体が多いが，逆釣り鐘形の体部をもつ350～353のような個体差もある。体部上半に左上がりのタタキをもつ345・351・352などの甕もあるが，この傾向はＡｅの一部にしかみられない。なお354は，甕Ａｅに脚台を付加した弥生形台付甕である。355～364は小形の甕Ａｄで概ね倒卵形の体部をもつが，364のようにやや扁平な体部の個体もある。365～369・371～376・382は中形の甕Ａｃである。口縁部は頸部から短く「く」の字に曲がるものが多いが，366・375は直線的でやや長めの口縁部を付加している。377～380・383～386は大形の甕Ａｂである。体部の形状には倒卵形の383，やや長胴傾向のみられる384～386がある。389・390は超大形の弥生形甕Ａａである。体部は倒卵形で最大径部が大きく張り出している。390は口縁端部に刻目を巡らせる。確実な搬入土器の甕は370・372・477・478の４点である。370は模範的な倒卵形を呈し，尖底気味の底部に狭い平底をもつ。体部は横方向タタキのち縦方向ハケを加え，内面には弱いケズリがある。口縁部は短く直線的に延び，また体部に対する傾斜角度が弥生形甕Ａより大きい。外来系土器Ｉ類。372は河内からの搬入土器で，在来系土器II類。477・478は東海系の台付甕の脚台である。外来系土器Ｉ類。

高杯には有稜高杯，椀形高杯，コップ形の高杯Ｘを認める。口縁部で計測して48点。有稜高杯は41点が出土しており，Ａａ，Ａｂ，Ｂに細分が可能である。391～400は，いずれも典型的なＡａである。やや内湾気味の体部から，明瞭な稜線で画された口縁部が大きく外反する。稜線の上はいわば顎のような平坦面をもち，口縁部との間に段を形成する。口縁端部はいずれも僅かに上方に拡張され，その外面に緩い端面を有する。脚部は脚柱部と裾部の境界が明瞭で，脚柱部内面は上半が中実となり，下半には臍のような浅い窪みがある。Ａｂは顎状の段を欠くが明瞭な稜線をもつ一群の有稜高杯で，401・404～406・409・411～415を抽出した。脚部はいずれも脚柱部と脚裾部の境界が明瞭で，脚柱部の内面は中空の406・415，器壁が肉厚となって脚柱部に円錐状の窪みをもつ401・404・405がある。Ｂは稜線を強調しない一群で，402・403・410・416～418を抽出している。脚部を残す個体では，すべて脚柱部は中実である。407・408は搬入土器である。407は内湾する受部に屈曲する口縁部を付加した有稜高杯Ｘで，脚柱部は裾広がりとなり，さらに明瞭な境界で画された広がる脚裾をもつ。脚部内面は中空で，杯部に接する中央に細い刺突様の痕跡がある。やや太く鈍いミガキＢで杯部内外面を調整する。瀬戸内沿岸地域に由来する外来系土器Ｉ類であろう。408は形態上では404と類似するが，口縁部内外面に横方向ハケのち縦方向ミガキＡを加える点で，調整法を異にした有稜高杯Ｘである。また色調も異なり，在来系土器II類と考えておきたい。421～423は椀形高杯である。３点。いずれも杯部は同形同大で423の他も椀形高杯Ｂであろう。完形品の423では，浅い円錐形の脚頂部に杯部が接合されており，脚柱部は極めて短くほとんど存在しない。脚裾の径は口径を僅かに凌駕し，裾部端には刻目を配する。コップ形の高杯Ｘ424・425は，小さな椀形の受部にやや内湾気味に広がる口縁を付加した高杯で，短い脚柱部と広がった脚裾